
黒魔術師松本沙耶香 紫蝶篇

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

黒魔術師松本沙耶香 紫蝶篇

【Nコード】

N7630B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

スペインマドリッドで謎の連続少女失踪事件の解決を依頼された松本沙耶香と速水丈太郎。二人はそこで紫の蝶を操る高田依子と対峙する。蝶の謎、そして少女達は何処に。今回も沙耶香は美酒と美女を味わいつつその妖艶な世界を楽しみます。

第一章

黒魔術師松本沙耶香 紫蝶篇

スペイン。情熱の国と呼ばれている。この国は夜もまた熱い。その夜の世界の中で様々な色の宝石の如き蝶達が待つていた。それは有り得ない光景であった。

「これは……どうということ？」

それを見る黒髪の美女が夜の世界に舞うその紫色の蝶達を見て顔を顰めさせる。夜に蝶が舞う筈がない。しかし今その蝶達が待っている。彼女はそれを見ていぶかしんでいるのだ。

マドリードの街の中。サルエスラの観劇が終わり一人家に帰る夜道でそれを見る。その不思議な蝶達を不可思議な目で眺めている。

黒く波がかった長い髪を後ろで束ね黒く背中が見える上着に赤く長いスカート。典型的なスペインの女の服だ。その服を着ている彼女の顔は浅黒く目鼻立ちがはっきりとしている。細面でその眉はまるで描かれたように綺麗な形を描いている。その彼女が紫に輝く蝶達を見て怪訝な顔をしているのであった。

「何故夜に蝶達が」

「それはね」

ここで夜の中で声がした。

「貴女が欲しいからよ」

「私が!？」

「ええ」

それは女の声だった。美しい声だ。だがそこには得体の知れない邪悪なものを感じさせるような。そうした声だった。それが今闇の中から聞こえてきていた。

「貴女が。その美しさが」

闇の中から何かか姿を現わした。その後には。誰も残ってはいなかった。

マドリードの街中のレストラン。そこで一人の妙齡の女が食事を採っていた。木造りの店の奥、同じく木製のテーブルに座って赤いワインと羊の肉をガーリックで焼いたものをフォークとナイフで食べている。かなり整った綺麗な食べ方と飲み方をしていた。

黒い髪はさらりとしておりそれを上で束ねている。切れ長の二重の瞳はブラックルビーの様に妖しくも美しい光を湛えておりそれでワインを見ていた。小さな口は紅であり白い雪の肌はスペインの女のものではない。

その鼻は高く流麗な形をしている。極めて整った、それでいて妖艶さを濃厚に漂わせる美貌であった。その美貌と漆黒のスーツとズボン、白いシャツ、赤いネクタイで覆っていた。見ればアジア系の女であった。

「そちらでしたのね」

そこに一人の中年のスペイン女がやって来た。黒い瞳と目は黒衣の女と同じだったがその浅黒い肌とはつきりした顔立ちはスペインのものである。縮れた髪を伸ばし大きな口を持っている。赤いシャツに黒いスカートといういでたちであった。

「松本沙耶香さんですね」

「はい」

その女松本沙耶香はそのスペイン女に顔を向けた。そのうえで答えてきた。

「私ですが」

「お待ちしておりました」

「では貴女が」

沙耶香は彼女に顔を向けて言う。

「ローラ」ロスアンヘルスさんですね」

「ええ」

そのスペイン女はにこりと笑って述べてきた。

「その通りです」

「わかりました。それでは」

「そうですね。御一緒させて下さい」

そう言うと沙耶香の向かい側の席に座ってボーイにメニューを注文した。そのうえで彼女と話をはじめる。

「お話は聞いておりますね」

「はい」

沙耶香はその言葉に応える。

「失踪事件ですね」

「そうです。妹がいなくなりました」

ロスアンヘルスはそう答えた。

「テレサが」

「またどうしてなのでしょう」

沙耶香はそれに問う。その時ロスアンヘルスに生ハムとワインが運ばれてきた。彼女はそれを飲みながら沙耶香と話を再開させた。

「原因は一切不明です」

「ですから私を日本から御呼びしたのです」

「そうですね」

ロスアンヘルスはそう述べる。述べながらワインを飲む。その顔はお世辞にも明るいと見えぬものであった。

「御足労でしたでしょうか」

「いえ」

沙耶香はその言葉に首を横に振る。

「これも仕事ですので」

「左様ですか」

「はい。ですから御心配なく」

「そうですね」

ここで若い男の声があった。

「妹さんでしたよね」

「!?!」

ロスアンヘルスはその声の方に顔をやる。沙耶香は見ない。そこ

には黒髪で顔の左半分を隠した青いスーツの男がいた。白いコート
の裏地は赤でネクタイはスーツと同じ青だ。見ればアジア系の整っ
た顔立ちをしている。陰のある印象の男であった。沙耶香は彼が誰
であるのかよくわかっていた。

「貴方も呼ばれていたのね」

「はい」

その男速水丈太郎は沙耶香に答えた。答えると共ににこりと笑っ
てきた。

「はじめまして、ローラ＝ロスアンヘルスさん」

速水はロスアンヘルスに声をかけてきた。

「速水です」

「ようこそ」

ロスアンヘルスは速水に伝えてきた。

「貴方が速水さんでしたのね」

「はい、お待たせしました」

速水はコートの懐から一枚のカードを出して述べてきた。それは
太陽のカードであった。タロットカードの大アルカナの一枚である。

第二章

「それはタロットですか」

「はい、妹さんを占わせて頂きました」

彼は言う。

「出たのは生命力の証。ですから大丈夫です」

「そうなのですか」

「ただ」

彼はここでまた懐からカードを出してきた。それは吊るし人のカードであった。

「よくはない状況に置かれていますね」

その吊るし人のカードをロスアンヘルスに見せながら述べる。見ればカードの中の男は縛られて吊るされている。それが何を意味するのか速水にはよくわかっていた。

「囚われています」

「誘拐されたと」

「おそらくは」

彼は答える。

「しかし御命は」

「それを安心していいのですね」

「ええ。それでは詳しいお話を」

「それでは」

速水は二人が座っているテーブルについた。そこで詳しい話をはじめたのであった。

「実は二人御呼びしていたのです」

「そうだったのですか」

「ええ」

そう二人に対して答える。

「お話していなくて申し訳ありませんが」

「いえ」

しかし二人はそれをよしとした。そのうえで彼女の話聞く。

「残念ですが手懸かりも何もありません」

「そのようですね」

速水がそれに応える。

「またこれが出ましたから」

懐から出したカードはやはり吊るし人であった。苦境を意味している。

「今のところはそれですね」

「ええ。それにしてもタロットを使われるのですか」

「はい」

速水はその言葉に応える。

「変わっていますか。日本人がタロットを使うのは」

「いえ、別に」

しかしロスアンヘルスはそれを否定しなかった。あえてこう述べる。

「むしろかなり広まっているものだと思います」

「私にはこれが一番なのです」

口元に笑みを浮かべて述べてきた。

「これがね」

「そうなのですか」

「はい。占いはインスピレーションです」

そう答えてきた。

「だからこそ私はタロットをしているのです」

「そのカードにより全てを教えられる」

「その通りです。今もまた」

また述べる。目が静かなものになっていた。

「見ているのです。カードから」

「それにしてもね」

沙耶香がここで述べてきた。

「何もわからないというのは残念なことですね」

「ええ。ただこれは妹だけではありません」

「といたしますと」

「やはり」

「そうです」

彼女は二人を目だけで見回す。それからまた答えてきた。

「この街全体で。かなりの少女が消えているのです」

「少女が、ですか」

沙耶香はその言葉を聞いて思案の色をそのブラックルビーの瞳に浮かべてきた。そのうえでさらに考えだしているようである。

「他には」

「男の人の行方不明者はありません」

彼女は答える。

「そうしたようなものは」

「そうしたようなもの」

速水がその言葉に反応を示してきた。そのうえで問うてきた。

「何か特徴があるのですか？」

「全て夜なのです」

ロスアンヘルスはまた述べる。

「少女達が消えたのは」

「夜、ですか」

沙耶香はそれを聞いてさらに思案に入った。その目には夜の世界が見えているようであった。

「そうです、夜に」

「そこですね」

沙耶香も速水もそれを聞いて述べてきた。二人は同じ言葉を出してきていた。

「問題があるのは」

「そうですか、やはり」

「そう、夜ですね」

夜という言葉を読む沙耶香の目が妖艶に細まってきた。まるで夜そのものを待ち望んでいてその到来を楽しんでいるかのようであった。

「夜なのですよ。本当の時間は」

「本当の時間!？」

「そうです。夜こそが世界の真の姿」

彼女は言う。

「美も妖もそこにあるのです」

「スペインの夜は長いと言われていますが」

「ええ」

その言葉に妖艶に笑ったまま頷く。目はその夜を見て楽しんでいった。

「そうですね。ならばお任せ下さい」

彼女は言う。

「この仕事。喜んで引き受けさせて頂きます」

「有り難うございます」

ロスアンヘルスは綺麗なスペイン語で返した。当然ながら沙耶香も速水もスペイン語で話をしている。それは流暢で整ったスペイン語であった。二人はまるで日本語を操るように話をしたのであった。

「では貴方は」

「私はですね」

速水はいささか真面目な態度でロスアンヘルスに応える。

「依頼された仕事は来る前にカードに教えてもらうのです」

「カードに」

「ええ。そしてその仕事を受けるかどうか決めます。受ける時は」

「その時は」

「既に来ています」

そう述べてきた。

「ですから今は」

「受けて頂けるのですね」

「そういうことです」

こくりと頷いて答えてきた。

「それではセニヨリータ「ロスアンヘルス」

「はい」

彼のセニヨリータという言葉に目を細めさせて応える。

「今後共宜しく願います」

「わかりました。それでは」

それに頷いてからボーイを呼び止めてきた。それでまた注文する。

「ワインをどうぞ。私の奢りです」

「あら、気前がいいですね」

沙耶香はその言葉に今度は口元に笑みを浮かべさせてきた。まんざらではないといった顔であった。

第三章

「奢って頂けるなんて」

「スペイン人は気前がいいのですよ」

それが彼女の返答であった。

「お酒と食べ物に関しては」

「イタリア人と同じく」

「ふふふ、そうですね」

速水の言葉にも笑みを浮かべる。どうやらイタリア人と比較されても彼女は特に不満ではないらしい。なおどちらもラテン系であるのは言うまでもないことである。

「恋愛が好きですし」

「情熱の国スペイン」

沙耶香はその言葉に何か楽しみを見出しているようであった。なおロスアンヘルスは彼女のことは詳しくは知らない。その性的嗜好についても同じである。

「そうでしたね」

「ええ」

何も知らないまま彼女に答える。

「まさかとは思いますが」

そう語ったうえでロスアンヘルスは暗い顔で述べてきた。

「何か」

「いえ、まさかですが妹は」

「それは御安心下さい」

しかし速水が彼に述べてきた。

「駆け落ちを心配されているのです。誰か見知らぬ男と」

「ええ。妹はその、私から見ても美人ですから」

その問いに正直に答える。美人であるというのはそれだけで中々大変であったりするものだ。これは何時の時代のどの国においても

変わりはしない。情熱の国スペインにおいてもかつてはひそんだ愛を好んだ日本においてもである。

「若しかしたらと思ひまして」

「これを御覧下さい」

速水はまたカードを出してきた。それは悪魔のカードであった。

タロットカードの十五番だ。不吉な意味も多いカードである。逆であつてもあまりいい意味はないことも多い。中々解釈の難しいカードであると言つていい。時と場合によつてそれが大きく異なるのだ。この場合はどうなのであろうか。

「悪魔ですね」

「はい」

ロスアンヘルズはそのカードを見て頷く。紛れもなく悪魔のものであつた。

「ここで愚者が出ていたならばそつでした」

「愚者ですか」

「そつ、冒険です」

彼は述べる。

「それが出ていたならばその可能性がありました。しかし悪魔が出ました」

「わかつたわ」

沙耶香はその悪魔のカードを見て述べてきた。

「今回の事件はおそらくは」

「はい。やはり」

速水はそれに応えて言葉を返す。

「魔性の存在ね」

「そうですね。それを考えると私達におあつらえ向きな話です」

速水はクールさを保つたまま述べる。彼も沙耶香もそこに見ていたのは異形の存在であつたのだ。

「夜なら当然ね」

沙耶香は言う。

「異形の存在も」

「はい。それでは」

速水は沙耶香のその言葉を受けて言葉を出す。

「この事件はお任せ下さい」

ロスアンヘルスに顔を向けての言葉であった。

「必ず解決してみますので」

「お願いします」

ロスアンヘルスの言葉は切実であった。務めて冷静さを装っているが魔性という言葉にえも言われぬ不安を感じているのは明らかであった。

「本当に」

「ええ。それでは今宵は」

沙耶香はまるで動じない様子で彼女に声をかけてきた。その手にはグラスがある。

「心ゆくまで」

「わかりました。それでは」

「はい」

こうして三人はその夜は美酒と美食を楽しむのであった。ひとしきり飲み終えてからロスアンヘルスは別れた。沙耶香と速水は二人でマドリードの夜の世界に出たのであった。スペインの暑い夜が彼等を包み込む。

「ところで」

沙耶香は速水に顔を向けて述べてきた。

「前から思っていたけれどその服で暑くないのかしら」

「それは私も思っていたことです」

速水も沙耶香に問う。

「魔術を使われていますね」

「ふふふ」

その問いに目を細めてみせる。妖しい光がその奥に輝く。

「貴方もね」

「私は違うのですよ」

しかし速水はそうでない返す。沙耶香を見て笑いながら。

「心が冷たいもので」

「何が言いたいのかしら」

沙耶香も彼の言葉に思わせぶりに笑って返す。

「わからないわね」

「またそのようなことを」

沙耶香はあくまでとぼける。そう易々と応えるつもりはないようである。しかし速水もそんな彼女を見て笑うのであった。

「今宵はどうされるのですか？」

速水は沙耶香に問う。

「私はホテルに戻りますが。ホテルは取ってありますよね」
「いいえ」

笑ってそれを否定する、

第四章

「ないわよ」

「さて、それは面妖な」

速水はその言葉を聞いて笑ってみせる。

「泊まる場所がないとは。貴女らしくもない」

「貴方の部屋を提供してくれるとでも？」

「そうお願いできますか？」

速水も沙耶香に笑って言う。二人は笑みを浮かべながらも丁々発止となっていた。

「宜しければ」

「生憎だったわね」

しかし沙耶香はここで述べてきた。

「私は確かに今はホテルはないわ」

「さて、ではどうされるのですか？」

「それでも泊まる場所はあるのよ」

「何処ですか？」

「秘密よ」

妖艶に笑ってそれに返す。

「悪いけれどね」

「いえ、わかりましたよ」

しかし速水は彼女の心の中がわかった。彼もまた目を細めさせている。

「どうやら貴女は」

「夜は長いわよね」

沙耶香は言う。

「だから」

「今宵もまたですか」

「そう。スペインが情熱の国なら」

「私と共にというわけではないのが残念です」

「気が向いたらね。貴方とは」

「さて、それが何時になるか」

自嘲はない。彼もまた楽しんでる感じであった。その中の言葉である。

「待たせて頂きますか」

「今夜は失礼させてもらおう」

沙耶香は離れてきた。

「これでね」

「仕方ありませんね。それでは」

速水は姿を消すしかなかった。沙耶香はそのままある場所へ向かう。それはマドリードにある日本の大使館であった。その官邸に向かう。

その足で大使の官邸に入る。その際姿を魔術で消す。ある部屋の窓から身体を霧にして官邸の中へ入ったのである。

沙耶香が入った部屋には一人の女がいた。ナイトガウンに身を包み肘掛け椅子に腰掛けてボンネットの灯りを頼りに本を読んでいる。黒く長い髪を上でまとめている。歳は四十代後半であろうか。熟れきった色気を漂わせる顔と均整の取れた肢体は若い女にはないものがある。美少女がそのまま大人になったような、そんな雰囲気がある。処かにある。それと共に女帝の如き高慢さと冷淡さも併せ持っている。熟れた顔と身体にはそうしたものが複雑に絡み合い、尚且つ絶妙な調和を見せて存在していた。その彼女の側にあるテーブルに今ワインのボトルが一本置かれたのであった。

「誰？」

「私です」

そこにいたのは沙耶香であった。窓辺に立ちそこで右手にワイングラスを掲げて立っていた。そのうえで女を見ていた。

「はじめまして、鶴さん」

「貴女なのね」

「はい。お伺いに参りました」

その鶴という女に対して言う。顔と目を彼女に向けている。

「お元気かと」

「元気よ。ただ」

「寂しいのですね？」

そう彼女に問う。

「御主人もおられなくて」

「今日は帰らないと」

鶴は述べる。

「そう言われたわ。悲しいことにね」

「他の女性のところでしょうか」

「それだったらまだましね」

その流麗な目に悲しみを宿らせる。一人身を嘆いているのだろうか。

「仕事よ」

「左様ですか」

「イタリアまでね。今夜は帰らないわ」

「しかしそれは覚悟のうえでは？」

沙耶香はそう問う。

「外交官の妻としては」

「ええ」

鶴は沙耶香のその言葉に答える。

「ましてや大使夫人ともなると。わかつてはいたけれど」

「御父上を御覧になられて」

「御父様も主人もね。わかつてはいたわ」

「それでも肌は別だと」

「そういうこと。それはわからなかったわ」

そこにグラスが置かれる。宙に浮いたワインがその中に注ぎ込まれる。鶴はそのグラスを手に取る。そこでまた沙耶香が彼女に声をかける。

第五章

「奥様」

「奥様なんていいわ」

しかし鶴はその呼び方に不満げであった。それを目と言葉で出す。

「名前で呼んで」

「では智子さん」

沙耶香は彼女の名を呼ぶ。

「宜しいですか」

「ええ。一人より二人の方がいいわ」

「そうですね。では今宵は」

「来て」

智子は言う。

「そのまま私のところに」

「わかりました。それでは」

グラスを宙に浮かして首のネクタイを取る。しゅるっとな音がして外れる。白い首がそこに現われる。スーツの上を脱いで智子のところに来た。

「こうなったのは何時からだったかしら」

「さて」

智子の言葉にすつと笑ってとぼける。既に顔を彼女の顔のすぐ前にやり目と目を合わせている。じつと黒く濡れた目を見詰めながら笑っていた。

「ただ。貴女を知るということは私にとっては素晴らしいことでした」

「私の身体が？」

「私は身体だけを味わうのではありません」

また述べる。

「贅沢ね」

その言葉を聞いて笑う。悪い気はしていない。

「けれどそれがいいわ」

「そうですね。悦びとは贅沢であるもの」

沙耶香もそれに応えて言う。

「だからこそこのまま二人で」

「久し振りね。二人になるのは」

「御不満ですか？」

「貴女が教えてくれたのよ」

智子はそう返す。

「女というものをね」

「どうですか？女というものは」

沙耶香はその黒い目で智子の目を覗き込んでいた。熟れた果実を
今将にその手の中に収めんとしていた。

「悪くないものでしょう」

「だから。いいわね」

「はい、このまま」

智子の唇に自分の唇を重ね合わせる。そのままその椅子を場所と
して。二人は深い背徳の交わりの中に互いの身を浸すのであった。

それが終わった二人は夜の闇の中にいた。沙耶香が白い光を手か
ら放ち部屋を照らし出すとそこには裸身の智子が椅子の上にあった。

見事に歳を重ねたと言うべきであろうか。衰えない美しい身体を
している。

その身体を味わった沙耶香はもうスーツを着てベッドに腰掛けて
いる。しかしそのネクタイは首にかけたままでシャツも大きくはだ
けている。豊かな胸が露わになり黒く長い髪が下ろされたままであ
った。

「素敵でしたよ」

その白い朧な光の中で述べてきた。

「普段からは考えられない程」

「こんなではなかったのよ」

智子は横のテーブルに置かれていたワインを口に含んでから答えた。満足しきった顔をして沙耶香を見ていた。

「今までは」

「女もでしたね」

「そうよ。知らなかったわ」

そう答える。

「世の中には知ってはいけないとされるものがあります」

「そのうちの一つのね。これは」

「そうです。女が女を愛する」

宙に指で十字を描く。するとそこに白い十字架が浮かび上がった。沙耶香はその十字架を見てシニカルな笑みを浮かべてきた。馬鹿にした笑いであった。

「この十字架の下では背徳とされていますね」

「私はキリスト教ではないわよ」

智子は沙耶香が浮かび上がった十字架を見て述べる。

「言うておくけれど」

「わかっていますよ。かつて我が国ではこうしたものは何でもありませんでしたが」

日本においては同性愛は罪ではない。男同士でも女同士でもだ。

しかし智子が罪を感じているのはそれだけではないのだ。

「主人もいるのに」

「御主人ですか」

しかし沙耶香はその言葉にもシニカルな笑みを以って答えた。

第六章

「ええ。けれど」

「だからよいのではないのですか？」

「ここで智子にまた問う。」

「御主人を裏切っているからこそ」

「わかっているのね」

「勿論です」

また笑いながら述べる。

「罪を犯す。その楽しみこそが」

「貴女が私に教えた快楽」

「一度知れば離れることはできない」

十字架は消えた。そのかわりに青い三日月が現われた。沙耶香はそれを見てまた笑う。

「それが女と女の悦びなのです」

「同時に裏切る悦び」

「今夜は最後まで二人です」

青い月を見ながら笑う。

「宜しいですね」

「ええ。二人で」

智子は椅子からゆっくりと立ち上がった。そして沙耶香のところへやって来る。

「今度は私も楽しませて」

「先程のでは不満ですか？」

「不満ではないわ」

淫らな笑みを浮かべて言う。

「満足はしているわ。けれど」

「より楽しみたいのですね？」

「ええ。さあ」

「悪い奥様ですこと」

「そうさせたのは貴女よ」

また沙耶香に言う。

「だから」

青い月の下で二人はまた濃厚な交わりに入った。それが終わった時には朝になっていた。

沙耶香は朝になると服を着て智子の下を後にする。道に出るとそこに速水がやって来た。

「おはようございます」

「待っていてくれたのかしら」

「いえ。今来たところです」

速水は優雅に笑ってそれに答える。

「今しがた」

「そう。いいタイミングね」

「そうですね。それでは」

笑ったまま沙耶香に声をかける。

「行きますか」

「夜では見えないものが朝には見える」

「また逆もありますか」

「今は朝」

沙耶香は述べる。

「夜の世界を裏から見ましょう」

「はい。それでは」

二人は並んだ。そうしてそのままドリートの街を調べだしたのであった。

沙耶香と速水は二人で街の妖気を調べだした、しかしまだわかったことは少なかった。

昼まで調べたがわかったことは僅かであった。妖気が街のあちこちにあったのである。二人は夕方になって喫茶店に入っていた。そこでコーヒを飲みながら話をしていった。

「おや」

速水はその妖気を感じてふと声をあげた。

「この妖気は」

「ええ」

沙耶香もそれに応える。

「以前に感じたことがあるわね」

「しかしかなり巧妙に隠していますね」

速水はカードを出して首を傾げる。そこには太陽の逆があった。

太陽は生命や上昇を表わす。その逆ということは衰退や下降を表わすのである。

「それがかえって」

「何かを悟られたくないということかしら」

「さて。それに」

速水はそこにまた付け加える。

「かなりの魔力の持ち主のものであるのは間違いないようですね」

「そうですね」

沙耶香はその言葉に答える。

「それもね。間違いないわ」

「ええ」

速水もその言葉に応える。

「ですから。これは」

「人が限られてくるということかしら」

「スペインでここまでの魔力の持ち主です。御存知ですか？」

「いきなり言われても」

沙耶香とてすぐにそうした人物が頭に思い浮かぶわけではない。

スペインは日本から見てもあまりにも遠いのだ。だからこれといって知っている人物もいないのである。

「わからないわ」

「そうですね。私もです」

速水にも心当たりはない。どうにも困った笑いになる。

「しかし」

それでも彼は言う。

「かなりの術者であるのは間違いないわけですから」

「そうね。それにかんりの数ね」

沙耶香はそこにも注視していた。

「攫われた数は」

「一体全体。何人攫っているのか」

「さてね」

沙耶香はそれもまだ調べ切れてはいなかった。

「おおよその数がわからないまでね」

「それだけの女性を攫ってどうするのか」

「そもそも問題ね」

問題は実に多かった。二人は一旦コーヒーを飲んでからまた話に入るのであった。

第七章

「誰が何の目的でどうやって」

「一切がわかっていません」

「わかったら事件は解決だけれど」

「どうしますか？」

「夜ね」

沙耶香は述べてきた。

「夜になってからまた調べましょう」

「夜ですか」

「ええ。どうやら夜に出るようだし」

「それでは」

速水もそれに同意して頷く。

「そうしますか」

「そうね。そうしましょう」

またコーヒを飲んで述べる。スペインのコーヒは日本のものとはまた違う味であった。その味を楽しみながら述べるのであった。

「とりあえずは。それに」

「それに？」

「折角来たのよ。この街を楽しみたいわ」

口元に笑みを浮かべていた。今まで調べてばかりいたのでそんな余裕がなかったことを不満に思っているのである。それがわかる様子であった。

「そうでしょ」

「夜のマドリードですか」

「どうかしら」

速水を見て問う。

「それで」

「わかりました。それでは」

速水はそれに応えて頷く。既に彼のカップは空になりテーブルの上に置かれていた。コーヒーが白いカップに独特の模様を映し出していた。彼はそれを見て言う。

「そういえばこれで占いもできましたね」

「そうなの」

「はい。コーヒーカップ占いです」

そう沙耶香に言う。

「飲んだ後のコーヒーカップにできる模様を見て占うのです」

「面白い占いがあるのね」

「私のもではありませんがね」

薄く笑みを浮かべて応える。

「この占いは」

「何でも使えるというのではないのね」

「私の使うのはこれだけです」

そう言ってカードを見せる。タロットのカードであるのは言うまでもない。

「それは御存知の筈ですが」

「確かにね。それじゃあ」

彼の言葉に伝えてから述べる。

「夜になればね」

「はい」

二人はまずは姿を消した。しかし気配を探ることは続けやがて沙耶香はシベレス広場にある中央郵便局の前に現われた。

シベレス広場は大地の女神シベレスから名前を取ったもので旧市街と新市街の接点にある。そこにはそのシベレスの石像もあり噴水の中にある。

中央郵便局はそこにあり左右対称の壮麗かつ豪壮な建物である。

中央には塔が高く聳え立っておりそれはまるで宮殿のようである。

沙耶香は闇の中に浮かぶその宮殿の前にやって来たのだ。黒い闇の中に白亜の宮殿が浮かび上がりその前に漆黒の墮天使がいるように

あつた。

「あら」

ここで彼女は気付いた。一旦別れた速水も前からやって来たのだ。「貴方も来たのね」

「カードがここだと教えてくれましたので」

その手には小アルカナのカードが一枚あつた。彼はカードを使って市内を探りここまで辿り着いたということであつた。彼のいつもの探査方法であつた。

「それですよ」

「そう。私は感じたからね」

沙耶香はそう答える。

「ここにね」

「ええ。かなりの妖気を感じます」

速水は沙耶香の前まで来た。闇に浮かび上がる彼女の顔を見て笑う。その顔は白く夜の中で月の光のようにぼんやりと光っていたのだつた。

「ここに」

「そういえばここでも一人失踪したらしいわよ」

「女性がですか」

「ええ」

沙耶香は答える。

「ロスアンヘルスさんの妹さんとは別の方がね」

「そうでしたか」

「しかも。かなり強いわね」

沙耶香は述べる。述べながら右手を見るとそこには宮殿の如き中央郵便局の建物が聳え立っている。その建物を横目で見ながら話をするのである。

「強くなってきたわ」

「そうですね。ほら」

速水も右手を見た。見た方向は同じだがそれは正反対であつた。

沙耶香も同じ正反対の方向でありながら同じものを見たのであった。

第八章

「お邪魔してきていますよ」

「気が早いわね」

二人は中央郵便局の前を見ていた。そこには紫の蝶達がいて闇夜の中に待っていた。

「蝶、ね」

「はい」

沙耶香と速水はその蝶を見ながら言い合う。言い合いながら蝶と向かい合う。

「夜の世界に珍しいですね」

「美しくはあるわ。けれど」

沙耶香はここで言う。

「それはあつてはならない美しさね。夜の世界には」

「はい。それでは」

「さあ、何をしてくれるのかしら」

蝶達は何時しか二人の周りを漂っていた。蝶達を見回して二人は構えていた。

「この蝶達で。見えているわよ」

誰かに声をかけた。

「いるのでしょうか？この妖気」

「貴女ですね」

速水も言う。二人は全く同じものを見ていたのだ。

白衣の女が姿を現わした。白いスーツにズボン、そして天使の羽根の如き薄いコートを着た女だった。中性的な顔をして黒い目に黒い髪、それはアジア系のものだった。同じくアジア系の、それも白めの肌をしており長い髪を後ろで束ねていた。一見すると医者のような姿をしている。しかし彼女は医者ではない。その目は邪悪さと冷酷さ、その双方を渴望し楽しむ光を湛えておりその光で二人を見て

いた。彼女は二人を見て言ってきた。

「わかったのね」

「まさかこんなところで出会うとはね」

「因果なものです」

「何故出会ったのは聞かないのかしら」

その白衣の女高田依子は二人に笑みを浮かべながら言ってきた。

両手はコートのポケットに入れ口元には邪悪な笑みを浮かべていた。

「私としては聞いて欲しいのだけれど」

「じゃあ聞くわ」

沙耶香がそれに応えた。

「不本意だけれどね」

「冷たいのね」

「そうね。そういう因果だから」

依子にそう言葉を返す。

「それはわかっていると思うけれど」

「そうね。じゃあ言うわ」

「ええ」

依子が答えてきた。

「どうしてここにいるのかしら。これでいいのね」

「ええ。それはね」

「それは」

沙耶香だけでなく速水も彼女の言葉に注視する。三人の間に緊張が走る。

「全ては魔力を集める為」

「魔力を」

「そうなの。美しい乙女の身体からね」

「相変わらずね」

沙耶香はその言葉を聞いて述べた。

「やっていることは」

「そうかしら」

「ええ。どちらにしろ女の子が好きなのね」

「それは否定しないわ」

口元に笑みを浮かべて答える。

「貴女と同じでね」

「私はね。それだけではないわ」

依子のその言葉にすつと笑って答える。

「男の子もね。好きよ」

「貴女も。相変わらずみたいね」

依子は沙耶香のその言葉を聞いて彼女に声を返す。

「昨日も。一人抱いたわね」

「美味しかったわ」

それを隠しはしない。昨夜の智子の香りはあえて身体に残していた。その香りを楽しみながらマドリードの朝を迎えたからだ。

「熟れた果実というのはいいものよ」

「青い果実だけじゃないのね」

「青い果実もまた。素敵よ」

「困った方ですね」

速水は沙耶香のその言葉を聞いて述べる。

「相変わらず。どれだけの女性を愛されているのか」

「身体だけでなく心までも味わい尽くす」

沙耶香は妖艶な笑みの中で言う。

「それが私なのだから」

「それはね。間違っているわ」

しかし依子はそれを否定してきた。

「私は。女性からあらゆるものを吸い取る」

そう沙耶香に対して述べる。

「それが私のやり方。このマドリードでも」

「そうなの。けれど私達に会ったのが運の尽きよ」

すつと闇の中を滑るようにして言ってきた。そのまま前が出る。

第九章

「わかっているわね。私達に出会ったからには」

「ええ」

依子も逃げる気はなかった。前に出る沙耶香を見ても臆するところはない。

紫の蝶達は何時の間にか依子の周りに漂っていた。それをまとわせながら二人に対していた。

「さあ」

二人に声をかける。

「はじめるのね」

「ええ」

「勿論」

沙耶香も速水もそれに応える。二人はそれぞれの手に己の魔術を出してきた。

沙耶香は黒い炎を、速水はカードを。その手に持って依子と対峙する。彼女はその紫の蝶達を漂わせて構えもしてはいなかった。

まずは二人が先に動いた速水がカードを繰り出す。

だがその前に蝶が現われた。それでカードを打ち消した。

「むっ」

「まさかとは思っけれど」

依子は右目でその消えた蝶を見て目を動かさせた速水を見て問う。

「ただの蝶だと思っていたのかしら」

「いえ、流石にそうは思いませんでしたよ」

そう依子に返す。

「夜の中の紫の蝶。それはあまりにも妖しいので」

「そうよね。この蝶は私が創り出した蝶」

彼女は彼に答えて述べる。

「だから。他にも使い方があるのよ」

「来たわね」

蝶達はゆつくりと沙耶香達のところに舞ってきた。それは二人を取り囲みその燐粉を散らしてきた。それで二人を襲っているようであった。

二人もそれを見ている。沙耶香はそれを見てすぐに妖しさに気付いた。手に出している漆黒の炎を放ってきた。

「蝶を舞わせるのなら華麗に照らし出してあげるわ」

そう述べながらその炎を放つ。胸の高さで上に向けて広げられた手の平からそれは四方八方に拡がっていく。そうして蝶達を焼いていく。

「黒い光よ」

沙耶香は燃え上がり地に落ちていく蝶達を周りに漂わせて言ってきた。白い顔が黒い灯りに照らし出されていた。彼女はその有り得ない光の中で笑っていた。

「知っているわよね」

「ええ。何度も見てきたから
依子もそれに答える。」

「流石ね。けれど」

「けれど？」

「それだけでこの蝶達を退けたと思わないことね」

「どういうことかしら」

「これよ」

その言葉に答える。また蝶達が出て来た。

「同じではないのね」

「ええ。それに」

「それに？」

「そろそろ効いてきたのじゃないかしら」

「そのようですね」

速水がそれに答える。

「身体が痺れてきたようです」

「そういうことよ。この蝶達は普通の蝶達ではないから」
「そのようですね」

速水はそれに対しながらカードを出す。「二番目の女教皇のカードであった。」

それを右の人差し指と中指で持って自分の顔の前で掲げる。するとそこから一人の豪華な法衣を身に纏った女が姿を現わしてきた。

「女教皇ね」

「そうです。まさかとは思っていましたが」

そう依子に返す。

「相変わらず巧妙ですね」

「まさかとは思ったけれどね」

依子も述べる。

「貴方達なら話は別よ」

「左様ですか。しかしそれはこちらと同じこと」

速水はまた言う。

「貴方が相手ならば」

「危ういところだったわ」

沙耶香は蝶の毒から離れて速水に顔を向けていた。

「有り難う」

「いえ。御礼はまた今度」

「できることとできないことがあるけれどね」

「冷たいですね、それは」

「言いたいことはわかってるから」

すつと笑ってこう述べる。

「やれやれ。相変わらずですね、私に対しては」

「何度も言っているように気が向いたらね」

そう言って素っ気無い態度で返す。

「そういうことよ」

「左様ですか。もっとも貴女は違うようですね」

速水はまた依子に顔を戻す。依子も彼を見ていた。

「ええ、勿論よ」

「敵というのが残念かどうかはわかりませんが」

「そうかしら。私は敵であってよかったわ」

周りに蝶を漂わせている。その蝶をまた放ってきた。

「今度は違うのね」

「私のやり方は知っている筈よ」

沙耶香に対して述べる。まだ周りに蝶達を漂わせたまま。

「一度見破られたものは二度はしない」

「ええ」

沙耶香もそれに応える。

「そうだったわね。けれど」

そのうえで身構える。今度は氷の刃をその手に出している。

「こちらと同じことは続けないわよ」

「そちらも相変わらずなのね」

「否定はしないわ」

氷の刃から氷を飛ばす。それで蝶達を凍らせて砕く。紫の氷が割れ闇の中に落ちる。そのまま溶けて消えてしまう。しかし依子はまた蝶達を放ってきた。

「今度は私が」

次に出て来たのは速水であった。その手には太陽がある。

第十章

カードを上投げるとそこに太陽が現われる。その熱で蝶達を溶かすのであった。

「太陽ね」

「そうです。おわかりですね」

依子に言葉を返す。

「太陽は邪悪なるものを照らし出し溶かすもの。ですから」

「どんどん変えてくるわね。見事なまでに」

「貴女もね」

沙耶香は依子に述べる。

「見事なものよ。ただ紫の蝶だけを出すのではないから」

「ただ。思うところがあります」

速水が依子に問うてきた。

「何かしら」

「その蝶は。こうして攻撃や防御に使っただけではないですね」

「さて」

「隠しても無駄よ」

今度は沙耶香が問う。

「女の子達を消したのもこの蝶達なのね」

「ふふふ、わかったのね」

依子はその言葉を笑って肯定してきた。

「そうよ。この蝶こそが少女達を消したのよ」

「どうやってですか？」

「知りたいのね」

速水の言葉に笑ってきた。笑いながら言葉を続ける。

「それなら」

「むっ」

速水も沙耶香も依子がコートを翻したのを見た。するとその白い

コートの裏に色とりどりの蝶達がブローチのようにして飾られていたのであった。

「そうしたことだったのね」

沙耶香はその蝶達を見て述べた。

「そうして女の子達を」

「わかったのね」

沙耶香のその言葉に笑って返してきた。

「そうよ。この蝶達こそが」

「女の子達であると」

速水がここで言う。

「そういうことですね」

「ええ。だから」

依子はまた述べる。

「この女の子達は私のもの。美しい蝶達になって永遠に私の側にいるのよ」

「面白い趣味ね」

沙耶香は依子のその言葉を聞いて笑ってきた。

「女の子を蝶に変えて身に纏うというのは」

「そうでしょう？ただし」

「ただし」

「この娘達を盾にすることはないから。安心してね」

笑ってそう述べる。依子は戦いにおいて誰かを盾にする等という卑劣な真似はしない女だった。そのようなことをせずともどのような相手とも戦える、そうした確固たる自信が存在しているからである。彼女もまたひとかどの魔道の者であったのだ。

「それはいいわ」

「私は正々堂々と貴女達を倒せるわ。それに」

さらに言う。

「この娘達は私のもの。一人たりとも傷つけるつもりはないわ」
「蝶にしているからこそかしら」

「時々ね。戻してあげるわ」

沙耶香と同じ妖艶な笑みを浮かべてきた。

「そうして身体を楽しむのよ」

「貴女も。好きね」

「それはお互い様ね。じゃあ今は」

沙耶香に応えた後でまた言う。

「下がってあげるわ。またね」

「あら、もうなのかしら」

「今夜はほんの挨拶」

その中性的な顔にすつと笑みを浮かべての言葉であった。

「だからね」

「淡泊ね。夜はまだ長いわよ」

「誘ってくれているのかしら」

「ええ。駄目かしら」

「折角だけれどね」

笑ったままそう返す。

「今夜はこれで」

「また御会いしましょう」

速水が言う。

「すぐにでも」

「そうね。こちらもそうしたいわ」

依子はそう言葉を返してきた。

「是非共ね」

「それではまたね」

最後に沙耶香が述べる。

「御機嫌よう」

「また会いましょう」

依子は蝶達と共に闇の中に姿を消した。後には漆黒の闇が広がっているだけで何も残ってはいなかった。後には二人が残っているだけであった。

第十一章

「さて」

速水が沙耶香に声をかけてきた。

「一応は話が終わりましたね」

「そうね、今夜のところは」

沙耶香もそれに応える。

「終わりね」

「はい。ではこれからはどうされますか？」

「今日は宿があるわ」

彼女は言う。

「だから。心配は無用よ」

「今夜も駄目ですか」

「そうよ。残念だったわね」

くすりと妖しく笑って速水に返す。

「今夜も」

「そうです。悲しいことに」

「私の他の華はいらないのかしら」

「趣味には五月蠅くて」

右目だけを細めて答える。口元も同じであるが左目は見えない。

「最高の華しか駄目なのですよ」

「諦めが悪いわね」

「一途と言って下さい」

そう沙耶香に述べる。

「宜しいでしょうか」

「悪いけれど一途なんて言葉は知らないのよ」

沙耶香はあくまで沙耶香であった。そうした言葉は彼女には縁遠いものであった。一途という言葉も純情という言葉も彼女には縁のないものであるのだ。

「じゃあ今夜はこれで
「では私も」

二人はこのまま別れることにした。しかし速水は別れ間際に言う
てきた。

「明日の朝ですわね」

「わかったわ」

沙耶香も別れようとするところで足を止めた。それで速水に
応える。

「今日と同じね」

「はい。それではそのように」

「今夜は。一人で楽しむわ」

「おや、珍しい」

「一人でも夜は楽しむことができるわ」

黒い目を細めている。その目に妖しいものを宿らせて沙耶香は言
う。

「そうでしょう?」

「ワインですか」

「そう。紅の友が私を呼んでいるわ」

スペインは美酒でも知られている。沙耶香にとって酒は女と共に
なくてはならないものである。今宵はそれに溺れるつもりであつた
のだ。

「だからよ」

「そうですか。では私もそうしましょう」

速水もここは酒を楽しむことにした。

「貴女のことを想いながら」

「それで満足なの?」

「充分過ぎる程ですよ」

またその右目を細めて答える。

「貴女はいつも私の心にいますから」

「そう。それじゃあ」

「はい」

これで二人は本当に別れた。沙耶香はそのまま自分のホテルに入る。その一室でワインを友に長い夜を過ごすのであった。

朝になりシャワーと朝食の後で部屋を出る。するとそこにはもう速水がいた。昨夜の言葉通りであった。

「おはよう」

その速水に対して挨拶をする。

「おはようございます」

「早いわね、今朝も」

「迷惑ですか？」

「いえ。丁度いいわ」

すっと笑って述べる。

「朝は強いから」

「夜だけではなく、ですか」

「そうよ。こう見えても朝も好きなのよ」

「おやおや」

速水はその言葉を聞いて目を面白そうに細める。

「夜をあれ程愛しておられる貴女がですか」

「朝はいつも起きているわ」

沙耶香は述べる。実際に彼女は朝はいつも決まった時間に起きている。違うのは横にいるのが男か女か、そして何処の誰かということだけである。

だからこう言えるのだ。彼女はあまり眠らない女なのである。

「わかるでしょ」

「長いお付き合いですからね」

速水はまた右目を細めて述べてきた。

「わかつてはきました」

「それは光栄ね。それでね」

「はい」

二人は言葉を続ける、並んで話をしている。マドリードは朝から

かなり強い日差しで世界を照らしている。二人にはいささか場違いな程であったがそれでも彼女達は気にするところはない。

「今日はどうするのかしら」

「あの蝶ですね」

速水は述べてきた。

「あれについて調べてみますか」

「蝶を」

「そうです」

彼は沙耶香に答えてきた。

「今度のあの人が使う魔術がそれならば調べておく必要があるでしょう」

「確かに」

その言葉に沙耶香も同意して頷いてきた。歩きながら話に入っていた。

第十二章

「その通りね。けれどその前に」

「その前に」

「ロスアンヘルズさんにお話しておいた方がいいわね」

沙耶香はそう述べてきた。述べると共に黒い目を鋭くさせてきていた。

「彼女のことは」

「そうですね、彼女のことは」

速水もそれに同意して頷く。

「お話しておきますか」

「ええ。それにしても」

沙耶香はここで顔を上げてきた。

「こんなところでよく出会ったわね」

「全くです」

そんな話をしながら途中でタクシーを拾いロスアンヘルズの家へ向かう。マドリードのタクシーは言うまでもなくスペインの車だ。

車の中に入ると彫の深い黒い髪と目の運転手が大蒜と香水の香りをさせながら二人を迎えてきた。

「よお、日本人だね」

「あら、わかるのかしら」

「ああ、顔でね」

中年の運転手は笑ってそう述べてきた。端正な顔で運転手の制服も実によく似合っている。何処か歌手のプラシド・ドミンゴに似ていた。

「わかるさ」

「日本人とでも書いているかしら」

「そっいうわけじゃないがね」

それは笑って否定する。

「顔つきでわかるんだ」

「顔つきで」

「日本人と中国人は何か違うんだ」

彼は言う。

「アメリカ人とイギリス人が違うみたいにな」

「それはよく言われますね」

速水がそれに応える。二人はもう後部座席に乗っている。扉を閉めたところで沙耶香がスペイン語で書かれたメモをチップと共に渡す。ここで運転手はそれに頷きながら車を出す。車を出したところで話を再開させた。

「雰囲気ですか」

「表情だね。日本人やイギリス人は静かなんだ」

そう彼は述べる。

「言葉も穏やかだしね」

「そうなの」

沙耶香がそれを聞いて述べる。

「イタリア人とフランス人もだな。俺はイタリア人はいい」

運転手の考えではそうらしい。しかしフランス人は違うという。

「あの威張り腐った高慢さは何処でもなんだよ」

「あら、その高慢さがいいのではなくて？」

しかし沙耶香はその言葉に笑って返す。

「その高慢さをへし折ることこそが」

「セニヨリータ」

運転手は沙耶香に声をかけてきた。流石に後ろは振り向かないが

声の上機嫌なのがわかる。

「面白いことを言うね」

「実際にそうしてやったわ」

「ここでは同性愛のことはあえて隠し脚を組んで言う。」

「ベッドの中でね」

「いいね、日本人はそういうのは苦手だと思ったけれどこれはまた

「凄い女傑と出会ったものだよ」

「有り難う」

その言葉にすっと笑って礼を述べる。

「それでもな」

「ええ」

運転手の言葉に応える。

「問題はへし折った数だ。どの位だい？」

「言っているのね」

「いやいや、違うよ」

また笑って返す。

「俺が聞きたいんだ。いいな」

「ええ。それじゃあ」

それに頷いてから言う。

「百人よ」

「フランスだけでか」

「ええ。それでね」

さらに述べてきた。

「イタリアでは六四〇人、ドイツでは二三一一人よ」

「いいねえ、まあスペインでのことは聞かないでよくよ」

「日本では一〇〇三人ね」

笑って続けてきた。

「そんなところね」

「そりやまた凄い」

声でお手上げといった仕草を見せる。

「そこまでなんてな」

「関心してくれたかしら」

「まあね。ところでそちらの兄さんは？」

「私はそちらは全然駄目です」

話を振られた速水は苦笑いを浮かべて言葉を返してきた。

「そうは見えないけれどね」

バックミラーで速水の顔を見ながら述べる。

「その顔で」

「一途でして」

笑って言う。

「そうしたことはこちらの方程には」

「そうなのかい。まあ人それぞれだね」

運転手は彼のその言葉に頷いてみせた。

「俺だっつかみさんと一緒になるまで相当遊んだしな」

「遊んでこそが華」

沙耶香は深い笑いと共に言う。

「そうよね」

「あんたは遊びがわかってるね」

思わず言った。

「そこまで言えるなんてね。その若さで」

「運がいいことにね」

「運がいいのか悪いのか」

それはあえてぼかした。

「それはわからねえけれどな。まあ遊ぶのも悪くないもんさ」

そう述べるのとアパートの前に着いた。薄茶色の石造りの所々に緑の蔦が見えるいささか古めかしい雰囲気のアパートであった。感じが出ていると言えば出ている。

第十三章

「着いたぜ」

運転手はここで言ってきた。

「このアパートだよな」

「ええ」

沙耶香がそれに応える。

「ここよ。それじゃ今まで有り難う」

「おう、じゃあ今度は日本での武勇伝を聞かせてくれ」

「そうさせてもらっわ」

そんな話をして別れた。速水は一人になるとアパートの中へ向かいながら沙耶香に声をかけてきた。アパートの中は暗い階段が見えていてそれが上に向かって続いていた。

「男性か女性かまでは言いませんでしたね」

「それはね」

すっと笑って述べる。

「あえてね」

「相変わらず意地が悪い」

そんな沙耶香に苦笑いで返す。階段に足を踏み入れた。

「どちらが多いのかも」

「私は博愛主義者だから」

それが沙耶香の主張であった。

「だからよ」

「だからですか」

「そういうことなのよ。このスペインでもね」

「一昨日は日本の方ですか」

「プライベートよ」

それは笑ってオブラートに包み込む。

「残念ね」

「まあ相手はいいです。しかしスペインの女性ですか」

二人は少し薄暗い階段を上へ進んでいく。コツコツと音を立てながら石の階段をゆっくりと昇っていくのだ。見れば階段も結構な年季ものであった。

「貴方もどうかしら」

「いえ、私は」

また笑ってそれを返す。

「貴女だけと決めていますので」

「私の気紛れは何時になるかわからないわよ」

「ふふふ、もうそれもわかっていますよ」

相変わらずその言葉にも笑っている。

「待つのもいいものですから」

「そう」

「どうです。今夜は」

彼は階段を昇りながら提案してきた。

「ワインでも」

「いえ、夜ではなく」

「昼、ですか」

「そうよ。どうもスペインはね」

またしても楽しそうに笑ってからの言葉であった。

「昼も味わいがあるものだから」

「東京とは違い、ですか」

「東京は夜にこそなのよ」

それが彼女の東京という街に対する考えであった。彼は東京の夜を最も愛していたのだ。無論昼もであるがそれでも東京の夜に比べれば遥かに劣るものだ。東京の夜はこの上なく美しく、そして退廃した街だ。その退廃の中で飲むからこそ味わいがある、彼女は東京についてはそう考えていた。東京という街に対しての敬意から昼に飲むことはあまりしないようにしているのである。

「わかるわね」

「ええ。それでは飲みますか」

「お店はこちらで選んでいいかしら」

「はい、どうぞ」

それを彼女に譲ってきた。

「私はお付き合いますよ」

「素直ね。裏があるのではないかと思っけてしますわ」

「それはまた意地の悪い」

そう沙耶香に返す。

「私に裏があるのだと」

「その左目では何を見ているのかしら」

「右と同じですよ」

くすりと笑って言う。

「全くね」

「そうだったわね。御免なさい」

その言葉には謝罪で返す。

「それではボトルを一本奢らせてもらっわ」

「有り難うございます。それでは」

「ええ。行きましよう」

沙耶香は速水と共にある店に向かった。そこは有り触れたスペイン料理の店であった。だが今回はシーフードが主体の店であった。

第十四章

「シーフードですか」

速水は沙耶香の向かい側の席に座わっていた。そこでワインを飲みながら彼女と話をしていった。テーブルにはまだ料理はない。今はワインを飲んでいるだけである。

「スペインだからね」

沙耶香はそう答える。

「いいかしらと思って」

「そうですね」

速水は沙耶香のその言葉に賛成したように応えてきた。

「悪くはありません。むしろいい位です」

「パエリアはどうかしら」

沙耶香はそう言ってきた。

「それで」

「ええ、パエリアは好きです」

すつと笑って沙耶香に述べる。

「そして他には」

「そうですね」

ここでちらりとメニューを見た。それからまた言う。

「鰯のトマト煮にムール貝のアリオリ風にアボガドとアンチョビね」

「あとチーズも」

「いいわね」

沙耶香はチーズと聞いて目を細めさせてきた。

「ワインにはチーズね」

「そうですね。それがまずい」

その言葉に答える。

「いいです。やはりワインにはチーズです」

これは沙耶香も速水も同じ意見であった。二人はワインを飲みな

から話を続ける。

「そうね。それにチーズは」

「何か」

「あの香りがいいのよ」

ワインの杯を手にそう述べる。目が細くなる。

「女の子の地肌の香りと同じで」

「そうきましたか」

「そうよ。だからチーズが好きなのよ」

「ナポレオンと同じですね」

「残念だけれど違うわ」

上機嫌で酒を飲みながら述べる。

「ナポレオンは遊びを知らなかったわ。けれど私は」

「違うと」

「ええ。酒もまた女の子も」

彼女は言う。

「彼は知らなかったわ。浮気はしていたようだけれどそれは所詮」

「心から楽しんではいなかった」

「だから駄目だったのよ」

静かに速水に言う。

「むしろ私としてはタレーラン、いえブルボン王朝の貴族達の方が面白いわね」

彼等は遊びを極めていた。暇と金を持って余しておりそれを使う為にあれこれ考えているのである。その中で酒も女も楽しんでいた。

フランス革命後でナポレオンの下で外相を務めていたタレーランはその中でも特筆すべき人物であった。抜け目のない謀略家であり多くの者を笑みを浮かべて陥れ、ナポレオンでさえも度々裏切った。人を騙すことと甘言にかけては天才的であり最後には欧州各国の要人達さえも騙してフランスを捨てた。美酒と女性を愛し多くの隠し子を持つていたとも言われている。コーヒーについても面白い言葉を残している。

沙耶香は彼の方を好いていたのだ。悪というものを愛している彼女にとつてはタレーランの方に魅力を感じているのであった。

「悪は華」

沙耶香は言う。

「そうでしょ」

「貴女らしい言葉ですね」

「だったらわかるわね」

沙耶香は美酒を味わいながら速水の言葉に応える。

「私の言いたいことが」

「はい。それでは」

速水はそれに応えて述べる。

「今はナポレオンの没落にでも乾杯しますか」

「ええ」

ここで速水が笑ってタレーランではなくナポレオンの没落と言ったには理由がある。ナポレオンはスペインに侵攻してゲリラに悩まされた。後にスペインの潰瘍がフランス帝国を滅ぼしたとさえ言われた。

二人は美酒と美食を味わった後で一旦別れた。沙耶香はまずは影達を放つてから一人になった。それから今度はシエスタの時間を利用して街を歩くのであった。

第十五章

街を歩いていると。一人の日本人の若者を見つけた。場所はソル広場、熊の置物の前であった。女の子が二人である。見れば困った顔をして辺りを見回している。

「どうかしたのかしら」

沙耶香は日本語で二人に声をかけてきた。二人共黒い髪で髪が長い女の子は小柄で短い女の子は背が高くボーイッシュである。小柄な女の子は軽やかなロングスカートでボーイッシュな女の子はズボンであった。沙耶香は二人のそんな対象的な姿と服装を見て笑みを浮かべていた。

「困っているようだけれど」

「貴女は」

二人は沙耶香の言葉に同時に顔を向けてきた。

「日本の方ですか？」

「ええ」

沙耶香はその言葉に答える。

「そうだけれど。何かあったのかしら」

「いえ、実はですね」

「両替をしたいのですけれど」

二人は困った顔で述べる。

「お金がなくなつて。けれど」

「両替できる場所が閉まっていたのね」

「はい」

ボーイッシュな女の子が彼女に答えてきた。

「そうなんです、シエスタで」

「まさか公共の場所までなんて」

小柄な女の子も困った顔である。その顔で沙耶香に不安を述べていた。

「どうしたらいいの？」

「困ってるんです」

「時間を潰せばいいわ」

沙耶香はすつと笑ってこう言ってきた。

「ここは素直にね」

「素直にですか」

「そうよ」

今度は小柄な女の子に答える。

「わかったわね」

「わかりました。けれど」

それでも二人はまだ困った顔をしていた。

「時間を潰すにも場所が何処も閉まっています」

「どうすればいいの？」

シエスタのせいである。スペインやイタリアの風習で昼寝をするということである。この時間は殆どの店が閉まっている。彼女達はそれに鉢合わせしてしまい困り果てているということであったのだ。

「それではね」

沙耶香はそんな彼女達に助け舟を出してきた。

「いい場所があるわ」

「いい場所ですか」

「それは何処ですか？」

「一緒に来てくれるかしら」

目を妖しく細めて二人に問う。

「私と一緒に。どう？」

「ええ、じゃあ」

「そういうことでしたら」

二人は沙耶香が女性であることに油断していた。日本人であることと親切なこと、何よりも彼女が同性であることに安心したのだ。しかしそれこそが大きな罠だったのだ。何故なら沙耶香は二人が女だからこそ声をかけたのであるからだ。

二人はそのまま沙耶香について行った。案内された場所は沙耶香のホテルだった。しっかりした感じの綺麗なホテルで二人はそれを見ても安心した。

しかも場所はスイートルームであった。二人はもう安心したどころか喜んでさえた。笑顔でその豪華な白い部屋を見回していた。

「わあ、綺麗」

「こんな部屋に泊まっているんですか」

「そうよ」

答えながら部屋の扉に魔術を仕掛ける。それでロックしたのだ。

「凄いですね。何かお城みたい」

「アクセサリーも立派だし」

二人は部屋の細かい場所まで見ていた。沙耶香を見てはいなかった。それが間違いであった。二人は沙耶香がゆっくりと二人の前に来ているのに気付いてはいなかったからだ。

「ねえ」

妖しい響きの声を二人にかけてきた。

「はい」

「何ですか？」

「目を見て」

振り向いた二人にすぐに言ってきた。

「私の目を」

ほぼ条件反射でその目を見た時だった。沙耶香のルビーブラックの目が紅に輝いた。

それは一瞬であった。しかしその一瞬で充分だった。二人の動きが止まった。それから目の輝きがなくなる。人形のようになくなった。

「いい？」

また二人に問う。

「服を脱いで」

「わかりました」

「それじゃあ」

人形のようにこくりと頷く。それから言われるがままに服を脱ぐ。小柄な少女は白い下着に、ボーイッシュな女の子は青い下着にその身体を包んでいた。二人はその姿で沙耶香の前に立っていたのだ。

「ベッドよ」

沙耶香も服を脱いでいた。黒い下着にガーターストッキングであった。髪を下ろしその姿で二人にまた述べる。

「いいわね」

「ええ」

「そして」

「そして。次はね」

まだ部屋は明るい。しかしその明るい部屋の中で妖艶に笑いながら述べる。

「楽しみましょう。いいわね」

そうして二人をベッドへと入れる。次に沙耶香自身が。そのまま二人の肢体を楽しむのであった。

第十六章

それが終わってからであった。沙耶香はベッドの中で自分の左右にいる二人に声をかけてきた。ベッドの白いシーツの中でそれぞれ横たわっている。

「どうだったかしら」

沙耶香はくすりと笑って二人に問う。

「女は」

「女っていうよりは」

小柄な女の子が沙耶香に伝えて言う。

「貴女が」

「私なのね」

「はい、今までで一番よかったです」

そう沙耶香に言うのであった。

「男の人よりも」

「そう。それじゃあ」

その言葉を聞いてからボーイッシュな女の子にも声をかける。

「貴女はどうだったのかしら」

「私です」

整った顔の頬を赤らめさせて述べる。

「こんなことって」

「女はね。男に抱かれるだけではないのよ」

「はあ」

「女に抱かれるのもね。女なのよ」

「そうだったんですか」

「だからね」

また二人に言う。

「現実を忘れられたでしょう？今」

「嘘みたいです」

小柄な女の子が沙耶香の言葉にまた頷く。

「だからまた」

「いいですよね」

ボーイッシュな女の子もまた。二人はそれぞれ左右から沙耶香に身体を寄せてきた。

「積極的ね。はじめてなのに」

二人の言葉を同時に聞きながら目を細めさせる。

「けれど。いいわ」

「それじゃあ」

「また」

「さあ、いらつしやい」

二人に対して言う。そのまま三人で快楽を貪っていった。

熱い情事の後で二人と別れる。もうマドリードは夜になっていた。

一人その夜のマドリードを歩いていると左右と後ろから次々と人がやって来る。見ればそれは沙耶香自身であった。

彼女の影達であった。それが今戻ってきているのだ。彼女はその影達の話聞いていた。

街灯があらゆる方角から彼女と影達を照らし出す。沙耶香は歩きながら影達と対していたのである。

「五十人ね」

影の一つがそう沙耶香に述べてきた。

「消えた女の子達の数は」

「そう」

沙耶香は影達には目を向けない。正面を見て歩きながらその言葉を聞くだけである。

「全て。彼女の仕業よ」

「五十人も」

「全ては魔力の為ね」

影の一つがまた述べる。

「彼女のね」

「それだけではないわね」

沙耶香はそれに応えて言う。

「多分」

「楽しみね」

影達は言った。

「彼女自身の」

「彼女は欲張りだから」

ずっとその目を細めさせてきた。ブラックルビーの瞳が闇の中で美しく、妖しく輝く。

「何人でもなのよ」

「相変わらずね」

影達は述べる。述べながら沙耶香に近付いていく。

「そういうところは」

「困ったこと。けれど」

沙耶香は笑いながら言う。

「だからこそ戦いがいがあるわ。そうよね」

「ええ」

「それじゃあ」

「戻るのよ」

影達に言った。

「いいわね」

「わかったわ」

影達はそれを受ける。そのまま沙耶香の影の中に溶け込んでいく。街灯により幾つにもなっている薄い影達に入っていくのであった。

それが終わると沙耶香の前に今度は速水が姿を現わしてきた。カードを右手に持ち左手をポケットに入れた姿で歩み寄ってきた。

「五十人でしたね」

速水は沙耶香にこう言ってきた。

「私の調べたところでは」

「こちらもよ」

沙耶香はその言葉に応えて自分も数を言った。

「同じ数だったわ。五十人」

「そうですね。では間違いないですね」

速水はその数を聞いて言う。二人は今夜道にいた。そこで相対していたのであった。

「攫われた女の子達の数は」

「そうね。そして問題は」

沙耶香は言う。

「彼女が。何処にいるのかね」

「さしあたっては自分から出てくれるかも知れませんがね」

カードを出してきた。それは太陽のカードであった。タロットカードの十九番だ。再会を表わす場合もある。無論逆だとその意味はかなり異なってくる。

「このカードを見ると」

「貴方のカードなら確かなのでしようね」

沙耶香はその太陽のカードを見て述べる。

「では今夜にでも」

「はい。ではその場所は」

「感じるわ」

沙耶香は闇の中に照らされながら述べてきた。

「彼女の気をね」

「しかもこれは」

それは速水も感じた。左の髪の下が黄金色に輝いていた。

「いるわ」

「はい」

二人は頷き合う。

「場所は」

「プエルタ＝デル＝ソルね」

マドリードの中心部であり繁華街である。二人はそこに気配を察していた。

そうとなれば話は早かった。二人はすぐに側にある暗闇の中へと
溶け込んだ。そのままプエルタ「デル」ソルへと出たのであった。

第十七章

夜の繁華街であった。しかしそれは昼の話であり今は誰もいない。そう、紫の蝶達が舞っているだけであった。

「蝶！？まさか」

「いえ」

速水が声をあげたところで依子の声が出た。

「それはないわよ。安心して」

「そうですか。それでは」

「わざとここを選んだの」

依子の声があった。

「貴女達と戦う為にね」

「そう。じゃあ出て」

沙耶香は姿を見せない依子に対して述べた。

「それで。楽しみましょう」

「ええ。最初からそのつもりだったしね」

依子の声が語る。

「それじゃあ」

闇から白い姿を現わす。白い邪悪が闇から姿を現わしたのであった。その姿でゆっくりと前に出てきた。

「用意はいいかしら」

「ええ。いいわ」

沙耶香はそれに応えるとその右手に何かを宿らせてきた。それは氷の刃であった。

「氷なのね」

「そうよ。闇が綺麗だから」

そう依子に答える。

「わざとこれにしたのよ」

「それでは私は」

速水はカードを出す。それは皇帝のカードであった。皇帝のカードから鎧に包まれた男が出て来た。中世欧州の厳しい鎧である。右手には剣を持っている。

「四番目のカードを」

「皇帝ね」

「そうです。そして私自身」

速水自身もその手にカードを出す。そのうえで身構えてきた。

「その二つです」

「面白いわ。相手にとって不足はないわね」

依子は黒い目を闇の中で細めさせる。細めさせながら左手を掲げる。するとその左手に紫の蝶達が宿り漂いはじめた。

「二人で。いらっしやい」

「言われなくてもね」

沙耶香はその手にしている刃を手首だけで投げた。ナイフの要領である。

「これでどうかしら」

「小手調べかしら」

依子はその氷の刃を見て述べる。

「それは」

「そうよ」

氷の刃は一羽の蝶によって相殺された。氷が散って夜の闇をそこに映し出しながら落ちる。そこには蝶の紫の破片も映っていた。

「また蝶が変わったのかしら」

「蝶は私そのもの」

依子は述べる。

「その蝶を倒せるのかしら」

「面白いことを仰います」

今度は速水がカードを投げてきた。数枚のカードが依子に向かう。しかしそれは外れた。虚しく後ろを通り過ぎていくだけであった。外れた……わけではないわね」

「おわかりですか」

「長い付き合いじゃない」

目を細めて速水に返す。

「わからない筈がないわ」

「そうですか。それでは」

ここで投げた数枚のカードが弧を描く。反転して依子の背中を襲う。

同時に皇帝も出て来た。一気に間合いを詰めて剣を振るう。剣で突いてくる。しかし依子は身体を微かに動かすだけでそれをかわしていく。

表情すら変えはしない。まるで流れるように。だがそこにカードが襲い掛かる。すると依子は急に姿を消した。

「消えた」

速水はそれを見てすぐに今いる場所を変えてきた。前に出て跳ぶ。今までいた場所を紫の蝶達が舞ってきた。忽ちのうちに今までの場所が紫の妖しい世界に包み込まれたのであった。

「危ないところだったようですね」

「そのまま甘い霧の中で旅立たせてあげるつもりだったけれど」

依子はその紫の中にいた。着地し皇帝の側にいる速水に顔を向けていた。

沙耶香は彼女から間合いを離している。今度は背に黒い翼を出してきていた。

「そうはいかなかったわね」

「こちらもお付き合いです」

速水もその右目を不敵に笑わせながら依子に述べてきた。

「貴女のことにはわかりますよ」

「そう」

依子はその言葉に表情を変えず返す。

「危ないところではありませんが」

「残念だったわね」

「さて、面白い余興だけね」

沙耶香はその背の黒い翼を羽ばたかせてきた。見ればその羽根は鳥のものではなく黒い炎であった。地獄の炎の翼であった。

「今度は私が」

黒い翼から無数の炎の矢を放つ。それで依子を焼き尽くさんとする。

「さあ、これはどうするのかしら」

「その炎で私を焼き尽くすつもりかしら」

「長い付き合いで名残惜しいけれど」

炎の中で呟く。

「運がよければこれでさようならね」

「さようなら。いい言葉ね」

依子に無数の黒い炎が迫る。しかし彼女はそれを見てもまだ動くとはしない。

「けれど私は人にさようならと言われる趣味はないの」

「面白い趣味ね」

「お別れは自分から言うもの」

そう沙耶香に応える。

「永遠のお別れをね」

「あら。ではこれをどうするのかしら」

沙耶香は依子に対して問い返す。

「この炎を」

「簡単なことよ」

依子の黒い目の色が変わった。黒から青になったのであった。

サファイアのようにういてそうではない。サファイアの清らかさはなく邪まなものがある。美しさは魔界の美しさであった。

「さあ蝶達よ」

青い目で述べる。

「増えなさい。私の為に」

蝶達が増える。闇の中に次々と浮かび上がる。その蝶達を己の前

にやっつて炎と相対させてきた。

第十八章

炎の矢が蝶達の前に消されていく。やがて炎が尽きると今度は沙耶香の方に迫ってきた。

「さつきも言っただけれど」

ここで依子は沙耶香を見据えてきた。

「この蝶達は私自身なのよ」

「つまりあれね」

沙耶香はその言葉を聞いて言う。

「蝶達を通して貴女の魔力が相手に伝わり」

「ええ」

「相手を害していく。そして精气も」

「そうよ。わかってくれたようね」

依子は目を細めさせて応える。

「それがこの蝶達だったのよ。わかってくれたかしら」

「成程。道理で妖しい筈」

沙耶香はその言葉を聞いて述べてきた。

「けれどね。それだけではね」

「何か言いたいのか？」

「私にその蝶達が倒せないと思っっているのかしら」

「どうかしら。この蝶達は一つ一つが私自身」

依子は腕だけでなく身体全体に蝶を漂わせていた。それがまるで

紫の風のようにであった。吹き荒ばず、その場にたたずむ風であった。

「数え切れない私を相手にできるのかしら」

「女の子なら何人でもね」

沙耶香はそう依子に返す。

「できるけれど。貴女とは寝たことはなかったわね」

「何時かは、って考えているのよ」

依子はその青い目を沙耶香に向けていた。既に沙耶香の目は赤く

なっている。赤い光と青い光が闇の中でぶつかり合っていた。

「これでもね」

「ふふふ、そのわりには邪険なこと」

目から赤い光が消えて黒いものが戻って来る。依子の青い光も同じであった。

「奪うもの」

一言であった。

「私にとって愛とはね。そういうものだから」

「奪うのはいいわ」

沙耶香もその言葉には賛成する。

「けれど、それには悦びが伴わなくてはいけないわ」

「私の喜びは私自身が堪能し尽くすこと」

「違うわね」

沙耶香の細い目の黒い光は妖しく輝く。その光で依子の欲情を見ている。

「私は相手をとろけさせること。そうではなくてはね」

「考えの相違ね」

依子はそのままでは踏み込みはしなかった。そこまで言つつもりもなかったのだ。

「けれど、それならそれで」

「まだやるのかしら」

「いえ。今日はこれまでにしておくわ」

右手にグラスを出してきた。そこにある白いワインを飲む。それで喉を潤してから沙耶香と速水に対して言った。

「またね。会いましょう」

「ここから去られることはないのですね」

「何故去らなければならぬのかしら」

「そう速水に返す。」

「私はここで魔を集めているだけというのに」

「やれやれ。相変わらず頑固な方です」 42

苦笑いを溜息を同時に出してみせる。

「それではまた、ですね」

「ええ。またね」

紫の蝶の中に消えていく。

「御機嫌よう」

そう言い残して二人の前から姿を消した。後には沙耶香と速水だけが残ったのであった。

「明日ロスアンヘルスさんのところへ行こうと思っているのだけれど」

「依頼主のところですか」

「ええ」

そう速水に述べる。

「それでいいわね」

「そうですね。とりあえず犯人とその手段はわかりましたし」

速水も沙耶香に述べる。

「丁度いいタイミングですね」

「そうよね。だからよ」

沙耶香は答える。

「明日は少し忙しくなるわね」

「お嫌ですか？」

「忙しいのは好きではないわ」

口元だけで笑みを浮かべてそう述べる。

「できれば明日も一人、と思っていたのだけれど」

「その時間は問題ないでしょう」

速水はその言葉に笑ってみせる。

「違いますか？貴女はいつもその時間だけは作られていますから」

「そうね」

その言葉に笑って応える。

「否定はしないわ」

「やはり」

「けれどね」

沙耶香はまた言う。

「それはいつもとは限らないわ。何故ならね」

「花は選ぶと」

「そういうことよ。わかってくれたなら」

目を細めさせたまま言葉を続ける。

「いいわね」

「わかりました。それでは」

「はい」

二人は頷き合う。そうして一旦は広場を去り夜の街を後にする。そこにあるのは昼の世界とは全く異なる静かな夜の世界だった。

第十九章

二人はロスアンヘルスに今までのことと依子のことを話した。それは彼女にとっては思いも寄らぬことであると共に非常に興味深いことであつた。

「日本人の魔術師ですか」

「そうです」

速水が彼女に答える。今三人はロスアンヘルスの家のソファアに座つていた。そこで沙耶香と速水は並んで座つてロスアンヘルスと対していたのである。

「元々は陰陽道の者でして」

「陰陽道」

「日本の魔術です」

速水はそうロスアンヘルスに説明してきた。

「日本のですか」

「はい」

そう述べる。そもそも陰陽道とは五行思想や陰陽思想も入つた中国の思想の影響が強いものであるがそれ以上に式神を使った術で知られている。

「そこに西洋の魔術を取り入れているのです」

「それが蝶になつているのでね」

「そうです、日本のものだけでなく西洋のものも取り入れまして」

「私達と同じです」

沙耶香と速水はそうロスアンヘルスに述べた。

「私もあらゆる国の術を学んでいます」

「私입니다」

「そうだったのですか」

「そうです。彼女もまたそうである為」

「かなりの魔力を持っているのです」

「そもそもですね」

ロスアンヘルスは依子について尋ねてきた。

「その高田依子というのは何者なのですか？ 相当な魔力を持っているのはわかりましたけれど」

「元々は彼女の祖母にまで話が遡ります」

「祖母に、ですか」

「そうです」

沙耶香は答える。

「彼女の祖母もまた私達と敵対してしまして」

「そうだったのですか」

「その祖母と何度も激しい戦いを繰り広げてきていたのです
今度は速水が言う。」

「遂に決着を着けたのですが」

「彼女の戦いにそのまま入りまして」

「つまりあれですね」

ロスアンヘルスは二人の話を聞いてわかり易く言ってきた。

「祖母の仇であると」

「簡単に言つとそうなります」

速水はそれに応えてきた。

「まあ他にも関係があるのですがね。浅くはない関係ですし」

「何度も戦ってきたのです」

沙耶香と二人で述べる。

「その前にも何度も顔を見合わせていますし」

「どうにも。厄介な関係でもありません」

「その彼女がどうしてこのスペインにいるのでしょうか」

ロスアンヘルスはそれについても述べる。

「魔力を集める為だとは御聞きしましたが」

「それですね」

沙耶香がそれに応える。

「実は彼女は奇妙な性癖がありました」

「奇妙な」

「はい。具体的に申し上げると同性愛者でもあります
そう述べる。」

「何しろスペインは美女が多い国ですから」

「それは有り難いわね」

ロスアンヘルスはその言葉に一旦は目を細めさせる。

「けれど。それで魔力を集められるというのは」

「美女をこよなく愛しますので」

「それだけではなくて」

また速水が言葉を入れる。

「男性もまた。恋多き方なのです」

「情熱的なのかしら」

「それとはまた違います」

沙耶香はこう返した。

「情熱的というよりは背徳的で。妖しいことを好むのです」

「耽美なのかしら」

「そうなります。ですからまた」

「このスペインでもですね」

「そうなります。だからこそ」

ロスアンヘルスにあらためて言う。ロスアンヘルスもその言葉に聞きながらじつと沙耶香を見ていたのであった。その目を離しはしない。

「私達はこの依頼を最後まで果たします」

「ですから御安心を」

「わかりました」

ロスアンヘルスはその言葉に応える。

「それではお任せします。妹のことを」

「ええ」

こうして沙耶香と速水は依頼主であるロスアンヘルスに依子について述べたのであった。それが終わってからまた捜査をはじめた。

「一度占ってみます」

速水は二人でマドリードの道を歩きながら沙耶香に述べてきた。

「何をかしら」

「あの方の居場所ですよ」

沙耶香の顔を見て言う。

「本拠地をつけばこの捜査も終わりですね」

「確かにね」

沙耶香もその言葉に同意して頷く。

「それを調べるのね」

「はい。ですが」

速水はここでまた言う。

「あの方が相手です。容易な場所ではないでしょう」

「調べるのでさえ困難なのね」

「そうです。ですから」

カードは出さない。その声だけで語る。

「こちらも暫く力を集めます。ですから」

「わかったわ」

沙耶香は速水に対して頷く。

「じゃあ夜ね」

「夜に。何処で」

「貴方の部屋に行かせてもらおうわ」

「いいことです。それでは」

「期待はしないでね」

速水がその言葉に期待をかけるとすぐにそれを打ち消してきた。

「今から少しね」

「おや。今日ですか」

その言葉に右の目元と口元だけで笑うが言葉は寂しそうであった。

「それはまた」

「マドリードに来てね」

沙耶香は言う。

「寝たのは日本の娘ばかりだからね。だから」
「だから？」

「スペインの娘も味わっておきたいのよ」
まるで獲物を狙う蜘蛛のような目であった。その目でこれからのことを言うのであった。

「わかってくれるわね」
「嫉妬を感じますがね」

そうは言っても強い言葉ではない。沙耶香のそうしたところも見ているといった感じの言葉だった。

第二十章

「しかしそれを言っても貴女に詮無きことですので」

「私は誰にも縛られはしないわ」

速水に対して述べる。

「わかってくれていると思うけれど」

「わかっていますよ」

速水も彼女にそう返す。

「では。楽しんで来られて下さい」

「貴方は相変わらずなのね」

「残念ですがね」

右目だけで苦笑いを浮かべていた。

「私は奥手で一途ですので」

「損ね」

くすりと軽く笑う。

「その性分は」

「何、これでも自分では気に入っているのですよ」

また笑みを浮かべて沙耶香に言葉を返す。

「私の性に合っています」

「ならいいわ。それじゃあ」

すつと前に出て別れる。

「またね」

「ええ、夜に」

「それでわかることを期待するわ」

「それは御安心を」

「安心していいのね」

「私の占いは御存知の筈です」

自信を以って言葉を返す。こと占いにかけては速水の腕は誰にも負けないものである。それは彼も沙耶香もわかっていることであっ

た。

「ですから」

「期待させてもらっわ。それじゃあ私は」

「スペインの花を摘みに」

「積んだらそれで全ては終わりね」

「思わせぶりな笑みになった。」

「それはよくないわ」

「ではどうされるのですか？」

「味わうもの」

沙耶香は言う。闇の中にルビーを滴らせたような声で。

「摘めばそれで終わりだけれど花を味わうのは」

「相変わらずこだわりの強い方です」

「沿つかしら。自分で思ったことはないわ」

言葉を遊ばせる。楽しみながら心を穏やかにさせていく。

「じゃあね」

「それだけではないですね」

「女の子は最高のキャンバスよ」

「キャンバス」

「そう、この世で最も美しい絵画」

沙耶香にとっては女を愛することは芸術でもあるのだ。それをわかつているからこそ愛しているのである。無論それだけではない。

「では男の方は？」

「彫刻ね」

「そう例える。」

「絵画とはまた違うものよ。けれどまた別の味わい方があるわ」

「女性は誰もが花で」

「男性は華なのよ」

「華、ですか」

「そうよ。けれど今は」

「花が欲しいのですね」

沙耶香はもう何処かへと向かっていた。速水の言葉を後ろに聞きながら去る。その間に頷くのを速水は見ていた。だがその場はそれで終わりであった。

第二十一章

沙耶香は一人昼のけだるい雰囲気酒場に向かった。そこでは一人の美貌の女が一人で座っていた。

黒い髪を長く伸ばしている。その髪は縮れていて如何にもスペインの女といった感じである。その顔立ちもメリハリが利いて一見すると気が強そうである。浅黒さの入った肌と高い鼻に紅の唇。はっきりとした顔立ちの美女であった。

白い背中が見えて体型のはっきりと見える上着に赤いひらひらとしたスカートを身にまとっている。黒いヒールを履いている。

沙耶香は彼女に目を止めた。そのままずっと影のように近付いて声をかける。

「もし」

「はい」

彼女は沙耶香の言葉に応える。沙耶香はじっとその目を見てきた。

「似ていますね」

「誰にですか」

「いえ。実はですね」

そつと彼女の側に寄ってまた言う。

「お時間は」

「間も無くシエスタね」

彼女はうつすらと笑みを浮かべてこつ返してきた。

「それで充分かしら」

「はい。それでは席をお借りして宜しいでしょうか」

「向かいの席ね」

「ええ。駄目ですか？」

「初対面なのに大胆なこと」

「大胆にいくのが情熱ではないのですか？」

沙耶香は口元に紅の薔薇を溶かし込んだような笑みを浮かべて述

べてきた。その薔薇を楽しむかのように。

「違うのですか？」

「ふふふ、わかつているようね」

美女はその言葉に頬を緩ませる。彼女の笑みは誘うものであった。

「貴女は恋、いえ心を楽しんでいる」

「ええ」

沙耶香はそれに応えながら彼女の向かい側に座ってきた。座りながら言葉を交あわせていく。

「その通りです」

「その貴女がどうして私に声をかけてきたのかしら」

「花を愛するからです」

彼女を見ながら言う。

「それでは駄目でしょうか」

「率直ね。それは何処の流儀なのかしら」

「日本です」

沙耶香はじつと彼女の目を見て述べる。

「ですがそれ以上に私の今の貴女に対する気持ちそのものです」

「女でも？」

「女だからです」

既に答えも決まっていた。

「貴女だからこそ」

「大胆ね。女が女に声をかけるなんて」

「いけませんか？」

「ここはスペインよ。情熱の国だけれどそれはあくまで男と女の」と

くすりと笑いながら述べる。

「女と女については違うわよ」

この国は元々カトリックの倫理が非常に強い国である。その為同性愛に関しても厳しい部分があるのである。それを今出してきたのである。

「それについてはどうかしら」
「神ですか」

「そうよ。神はどうするのかしら」
「これですよね」

懐から何かを出してきた。それはロザリオであった。

銀色の救世主が捧げられているロザリオであった。それを美女に見せてきた。そのうえでまた笑うのであった。

「ロザリオですね」

「はい。これを」

ここで沙耶香はそのロザリオに光を当ててきた。すると銀のロザリオは金の三日月に変わったのであった。

「この世の摂理は儂く変わるもの。この月のように」

「手品かしら」

「いえ、魔術です」

そう返す。

「貴女に捧げる魔術。そしてこれも」

三日月から手を離すとそれはゆっくりと浮かび上がった。すぐに彼女の首にかけられたのであった。

「貴女に相応しいものを」

「私になのね」

「駄目ですか？」

「贈り物にしては。何か刺激的ね」

「刺激こそが貴女に相応しいのです。そう、愛には」

「では。何処で？」

「何処でもいいです」

沙耶香は言う。

「何処でもなのね」

「二人きりで。いいですか？」

「柔らかなようで強引ね。何時の間にか貴女の中に引き込まれているわ」

「そうでしょうか」

妖しい笑みを彼女に送ってとぼけてみせる。

「けれど。面白いわね」

「面白くはないのですよ」

しかし沙耶香はそれは否定する。

「面白いものではなく」

「楽しいものなのね」

「そうです。ではこれから二人で」

じっと目を覗き込む。そのまま琥珀の瞳の奥まで覗き込もうとしているかのようであった。

「宴へ」

「ええ」

こうして沙耶香はこの美女を籠絡することに成功した。女同士と
いうことを一旦は拒んでみせた彼女も沙耶香の言葉の前に陥落した。
そして二人は豪華なホテルのベッドの中で二人並んで寝ていたの
であった。

第二十二章

「女と寝たのははじめてよ」

美女はそのベッドの中で沙耶香に述べた。

「どうでした？」

「悪くはなかったわ。いえ」

言葉を変えてみせる。

「男よりもよかった部分も多いわね」

「そうでしょう。だからいいのです」

沙耶香はそう言った。

「男とでは味わえないものもある。女は女の身体も心も知っているのですから」

「それを教えてくれるなんてね」

「罪ならば犯せばいいのです」

こつこつ声をかける。

「犯してはならないこと程犯した時の罪の意識はあり」

「それが心をより快樂へ誘う」

「その通りです。ですから」

また身体を動かす。そのまま美女の上にまた覆い被さる。

「また。宜しいですね」

「ええ。来て」

美女は自分の上に覆い被さってきた沙耶香を抱く。その顔には艶のある笑みが浮かんでいた。その顔で沙耶香を見ていた。

唇を重ね合う。沙耶香は目を開けたまま美女の口の中に舌を入れていく。美女は目を閉じてその舌を受け入れ自分のものと絡み合わせた。

濃厚な口付けを交あわせる。沙耶香はその中でふと気付いた。

「どうしたの？」

「いえ」

沙耶香は口を離して美女に伝える。口と口を唾液がつかないでいる。

「蝶が」

「蝶？」

「はい。見て下さい」

二人が交わる枕元の壁に黒い羽根の蝶が一匹いた。それは静かに白い壁に止まっていた。

「あそこに」

「あら、本当ね」

美女は顔を上にやってそれを見た。

「どうしてここに」

「蝶ですか」

だが沙耶香はその蝶を見て楽しそうに笑うのであった。

「スペインでは蝶に縁があるようで」

「どういふことかしら」

「いえ」

その言葉には答えはしない。

「何でもありません。ただ」

「ただ？」

「蝶というのは美しいものに寄るものだというのを思い出しました」

「いいことを言っつわね」

沙耶香のその言葉に美女は艶のある笑みを返してきた。

「貴女も蝶ね」

「確かに。花を追い求める蝶です」

その黒い目を眺めながら述べる。奥まで覗き込もうとしている。

「貴女という花を」

言いながら頭の後ろに右手をやる。そして髪を解いた。

するとその黒髪が舞い下りる。ばさりと下りて二人の身体を包み込む。

「ですから」

「抱くのね」

「そうです。二人きりの宴を」

美女と二人で宴を味わうのであった。それが終わってからホテルを後にする。別れ間際にそのホテルを後ろに唇を合わせる。夜になつており沙耶香の白い顔が漆黒の中に浮かんでいるように見える。白い両手は美女の頬に添えられていた。

「また。会えるかしら」

「縁があれば」

そう美女に返す。熱い口付けの後でじっと目を見たまま。

「会えますよ。そしてその時はまた」

「愉ませてね」

「はい。それでは」

「会いましょう。その日まで」

「さようなら」

二人は最後の別れを交あわせて別々になった。沙耶香は一人になると夜の闇の中で煙草を取り出した。自分の右手の人差し指と中指に火を出してそれで点けた。

軽く吸ってから煙草を手にとって煙を吐き出す。白い煙と共に濃厚な退廃がその口から漏れる。

「蝶、ね」

沙耶香は一人呟いた。

「わかったわね。一つ」

そう呟きながら速水のところへ向かう。夜の闇の中を影のように進んでいく。

速水のホテルに入る。入るともうテーブルに着いていた。

「思った通りの時間ですね」

速水は沙耶香を見てそう言うてきた。青を基調とした部屋の中でカードを前にしていた。

「愉しまれたようで」

「ええ」

その言葉に眉を細めさせる。肯定の笑みであった。

「わかるのね、やっぱり」

「残り香で」

速水はカードを切りながら述べる。

「また美しい方だったようで」

「花だったわ」

沙耶香はそう答える。

「そして私は蝶ね。その美しい花を追い求める蝶」

「蝶ですか」

「そうよ。私は蝶」

速水の方に向かいながら述べる。

「それもわかったわ」

「その蝶が私のところにも来たと」

「ただ。今は花はいいわ」

しかし速水の誘いは断る。媚惑的な笑みと共に。

「もう堪能したから」

「おやおや。それは残念」

苦笑いを作ってそう返す。

「私は割を食ったというわけですか」

「そう考えておいて」

「全く。因果なものです」

「それでね」

沙耶香は速水に対して話を変えてきた。

「占いね」

「ええ。それですね」

本業である。速水はそれに対して述べてきた。

「今回はよく使うケルト十字ではなくホロスコープを使おうと考えています」

「ホロスコープね」

「そうです」

速水は答える。

「それを使って調べてみたいと思います」

「調べる対象は？」

「それはもう言うまでもないのでは？」

沙耶香のその言葉にはうっすらと笑って返す。

「あの方ですよ。ですからホロスコープなのね」

「はい。それでは」

机の上に重ねて置かれている二十二枚の大アルカナのカード。そのカードに触れるとすぐにそれは宙の上に舞った。速水の上で円を描き舞うのであった。

第二十三章

そのカードが十二枚で円を作りその中央に最後の一枚が舞い降りた。速水はまずは西の方角にあるカードを手にとった。

このホロスコープの占いは一つの決まりがある。一枚目が西にありそこから逆時計回りに一枚ずつ進み西北西のカードを十二枚目とする。そして中央に十三枚目を置きそれが最終的なカードとなるのである。

一枚目は強くなってくる性格的な面や運気を現わす。

二枚目は金運である。

三枚目は兄弟運や周囲の関係である。

四枚目は家族運だ。

五枚目は恋愛運等他人との関係や趣味に関するものだ。

六枚目は健康運やしなければならぬことになる。

七枚目は協力者や伴侶である。

八枚目は他の者から貰うものを現わす。

九枚目は学問や知性的な面を示す。

十枚目は仕事運、目上の人物の関係である。

十一枚目は友情運。

十二枚目は本人が気付いていない問題や敵である。

十三枚目が最も重要になる。ここに全体的な最後の判断が委ねられるのである。

こうしたふうにケルト十字とはまた違った占い方である。彼はそれをあえて使ったのである。

「これを使ってみましたか」

「関係なさそうな場所もあるわね」

「ですがこれを使ったのには理由があるのです」

しかし速水はこう述べる。

「おわかりでしょうか」

「ではそれを見せてもらおうわ」

沙耶香は彼の言葉を受けて言う。その目に深い知性と洞察を含ませながら。

「どういったものか」

「はい、それでは」

速水はカードを開きはじめた。

一枚目は女帝であった。二人はそれを見てまずは納得したのであった。

「これはわかるわね」

「そうですね。あの方らしいです」

女性的な英知や実りを現わす。これは依子が少なくとも英知を備えており魔力が大きくなるうとしてのことであった。体調面でも整ってきており力がみなぎっているということであった。

続いて二枚目。そこにあったのは星であった。輝かしい未来を指し示す。つまり彼女は金銭には困っていないということである。だがこの場合は同時に才能という財産にも困っていないということであった。ここでも彼女も絶大な魔力が現わされている。

「続けてこれが出ましたか」

「私に出ればいいのに」

「何、悲観されることはありません」

速水はそう彼に述べる。

「貴女もこういったものには困っていないではないですか」

「それもそうね。では気にしないでおくわ」

「そういうことで」

すっと目を細めて述べる。それから三枚目を裏返した。

出たのは塔の逆であった。破滅である。これはそもそも彼女が他人を関係ある存在としない為言うまでもないことであった。

四枚目は死神だ。既に家族であり師匠でもあった祖母はいない。

これも当然であった。

五枚目。出て来たのは悪魔であった。沙耶香と同じく背徳の罪を

楽しむ彼女を示すカードであった。悪魔のカードは誘惑や危険な恋、弄ぶことを現わすのである。

六枚目に出たのは力。あくまで自らの欲望と願望を目指す彼女の心を現わしていると言えた。即ち彼女がしなければならぬことはその力で己の欲する全てを掴むということである。

「ああ見えて頑固だからね」

「全くです。しかしこのカードはまた」

「相変わらず見事に現わしているわね」

沙耶香は述べる。

「完璧に彼女よ」

「そうですね。そして七枚目は」

出て来たのは運命の輪の逆であった。不安定に悪い方向、人付き合いなぞ必要としない彼女にとってこれも当然であった。

八枚目は魔術師。そのままであった。ただし彼女にとっては貰うのではなく奪うものである。その為の蝶達であるからだ。

九枚目は女教皇。今彼女は冴え渡り強くなっているということだ。女教皇は包容力や洞察、閃きを現わす。彼女にとっては洞察に閃きであった。あの青い目はまさにそれであるのだ。

十枚目は仕事運、即ち魔術師としての彼女そのものだがこれもまた今の彼女そのものであった。出たのは皇帝であった。絶大な力を持って君臨する皇帝の如き強さを示す、彼女の今であった。

十一枚目は審判の逆であった。簡単に言うならば今までの行いに對しての審判である。それが逆に出たということは彼女にとっては別に関係はない。これも友人というものがない彼女だからである。

だからこれは最初からそんなものはないということである。

十二枚目だが面白いものが出た。彼女、即ち依子が気付いていない敵。それに戦車の逆が出たのだ。

このカードはまさに正反対になる。正ならば勝利、逆ならば敗北であった。沙耶香はふとそれを見て気付いたことがあった。

「あの蝶ね」

「蝶？」

「その話しは後でね」

すぐには答えずに今は伏せておいた。

「それでいいわね」

「わかりました。それでは」

「ええ。いよいよ最後ね」

鍵である真ん中のカードだ。今それが開かれた。

出たのは隠者であった。そのカードを見て沙耶香はまずは眉を顰めさせた。

「隠者」

「成程」

しかし速水はそのカードを見てニヤリと笑った。まるで何かを感じたかのようにだ。

「隠れていますか」

「どういうことかしら」

「いえ、今の彼女ですよ」

その隠者のカードを右手に持ちながら沙耶香に述べる。

「隠者なのです」

「隠れているということね」

「はい。今彼女はこのマドリッドにてマドリッドにはいません」

「どういうことかしら」

沙耶香はその言葉を受けて考える顔を見せてきた。

第二十四章

「この街にいながらにしていない」

「普通にあるマドリードではないとするならば」

「そこは一体何処か、ですね」

「そうね」

ここでようやくやく席に着く。速水の向かい側に座った。

「次に知るべきものが見つかったわね」

沙耶香は言う。

「彼女が何処に隠れているか」

「それについて調べましょう。それでは」

カードを収めたうえで彼女に目を向けてきた。

「話はそこね」

「そうですね。ただ」

「ただ？」

「あの方のことです」

速水は右目に思案の色を浮かべて述べた。

「また洒落たところでしようね」

「そうね」

沙耶香もそれに同意して頷く。

「彼女のことだから。あの美意識で動いているのでしょうね」

「厄介な方です。いつもながら」

「因縁というものね」

沙耶香はそう言って口元に笑みを浮かべる。

「私達のね」

「願わくば因縁ではなく赤い糸であって欲しいものです」

「あら」

沙耶香はその言葉に顔を向けてきた。

「赤い糸だなんて。また少女趣味ね」

「私は信じているのですよ」

すつと沙耶香の顔を見て言葉を送る。

「貴女とは運命があるということを」

「どうかしら」

しかし沙耶香はそれには疑問の顔を浮かべてみせた。

「私は赤い糸なんてないわ。あるとしても」

「どうなっていますか？」

「幾つも。美女や美少女達とね」

「花から花に、ですか」

「そういうこと。わかってもらえたかしら」

「どうでしょうか。私には見えますよ」

速水も負けてはいない。沙耶香に笑って返す。

「赤い糸がね」

「それが幻でなければいいけれど」

「幻は真になる時もありますよ」

「聞いたことがないわ」

目を細めてその言葉をとぼけてみせる。

「そんなことはね」

「手厳しい方です。常に私をかわされる」

「そうでもないわよ」

「では。今夜はどうでしょうか」

そうでもないといった言葉に間隙を見て言葉を入れてきた。

「夜はまだ長いですよ」

「長い夜ね。それなら」40

そこでまた言葉を変えてみせる。

「街に出るわ」

「おや、街にですか」

「そうよ。街にね」

「ここでは過ぎされないと」

「残念ね。気分じゃないのよ」

笑みをたたえ続けたままの言葉であつた。言葉を操りながら進めていく。

「そういふ気分じゃ」

「残念なことです。折角スペインの名酒を用意しておいたのに」

「別の名酒があるわ」

だが沙耶香はそう返す。

「だからね」

「わかりました。それでは」

「ええ。またね」

五枚の花びらを持つ花を出してきた。赤、青、黒、白、黄の五色の花を。花を掲げるとその花弁が無限に別れてその中に覆われる。花びらと共にその姿も消すのであつた。

「勝手な方です」

速水は姿を消した沙耶香の姿を見て薄く苦笑いを浮かべる。薄い笑いであつたがそこには確かに残念なものを漂わせていたのであつた。

「ですが。また時間があるでしょう」

だからといって諦めるわけではない。それでも。彼は今は一人で飲むのであつた。

第二十五章

沙耶香はバーに来ていた。そこで一人カクテルを飲んでいた。

「お客様」

バーテンはカウンターにいる沙耶香に声をかけてきた。彼女は一人で酒を楽しんでいたのであった。今飲んでいるのはアドニスカクテル、シエリーとイタリアンベルモットの甘口のカクテルである。ギリシア神話の美少年の名を冠したカクテルであった。暗闇の中で淡い黄色の光が照らす薄暗い店の中でそのカクテルを楽しんでいたのであった。

「如何ですか、我が国のカクテルは」

「イタリアの味ではないわね」

それが沙耶香の答えであった。

「スペインの味がするわ」

「それはどうも」

バーテンはその言葉に微笑を浮かべる。まんざらでもないといった顔であった。

「ここはスペインですので。スペインの味にしました」

「そうだったの」

「ベルモットもスペインのものなのです」

「成程」

沙耶香はここでそのカクテルをまた飲んだ。あっという間にグラスを一つ飲み干してしまっていた。

「そのスペインだけねどね」

「ええ」

「楽しませてもらうわ」

沙耶香はそう言ってグラスをもう一つ頼んだ。

「もう一つね」

「どうも」

「ところで。いいかしら」

「何でしょうか」

「後ろのあれは何かしら」

ここで彼女はバーテンの後ろにかけられている絵を一枚出してきた。それは実に不思議な絵であった。

歪んだ時計にある筈のない場所に浮かんで歩いている人。陰の場所の所々に群がっている蟻達。それはスペインが生んだシュールリアリズムの大家タダリの絵であった。

「ダリね」

「そうです」

バーテンは沙耶香の言葉に答えた。

「おわかりですね。これはオリジナルですよ」

「オリジナル」

沙耶香はその言葉に顔を向けてきた。

「というタダリが直接描いたものなのね」

「はい。このオーナーが彼と知人です」

バーテンはそう述べてきた。

「生前に描いてもらったのです」

「羨ましいわね」

その言葉を聞いて目を細めさせてきた。

「私も一枚欲しいわ」

「ふふふ、そう仰ると思いました」

その言葉ににこりと笑ってきた。

「ですがそれはもう適わないことですので」

「ここでだけ楽しませてもらうわ」

「そうして下さい」

「それでね」

ここでふと気付いたことを述べてきた。

「その絵の中だけねど」

「ええ」

「奇妙なものね」

笑みが変わる。妖しいものに。

「奇妙ですか」

「そう、まるで人の心みたいね」

「面白いことを仰いますね」

沙耶香の言葉にバーテンも笑ってきた。

「ダリは好きですか」

「シユール＝リアリズムはどれも好きよ」

そう答える。

「現実でないようできて現実だから」

「現実ですか」

「そうよ」

バーテンはその言葉に首を傾げるがそれでも沙耶香は言う。

「現実にあるのよ。ただしそれは」

「それは？」

「人の心を映し出す鏡としてね」

「鏡、ですか」

「そう、鏡よ」

沙耶香は述べる。

「この絵は鏡なのよ。人の心の鏡としてね」

「それで現実にあるというのですね」

「そうよ」

またカクテルを口に含んだ。

「そういう意味であるのよ」

「そうですか」

「ええ。だからダリは好きなのよ」

そのダリの絵を見ていとおしげに述べる。彼女の趣味に合っているということである。言われてみればまさに沙耶香に相応しい世界であった。

「見ていて飽きないわ」

「それでしたら」

バーテンはここでまた話をした。

「何かしら」

「ダリの絵で他にも面白い絵を知っていますよ」

「面白い？」

「はい」

そう彼女に述べる。述べながらカクテルを作っていた。シェイクさせる手の動きが実に小気味だ。音もリズムカルで心地よいものであった。

第二十六章

「この街にあるものでして」

「何処にあるのかしら」

絵から目を離す。そのうえでバーテンに問う。

「その絵は」

「はい、それは」

沙耶香が丁度飲んだところでそのカクテルを置いてきた。

「待って」

しかし沙耶香は問いを一時中断させた。そのうえでバーテンに問う。

「そのカクテルは注文していないわよ」

「サービスです」

目を細めてすっと笑ってきた。

「私から貴女へ」

「何かあるのかしら」

「スペインの男は美酒を捧げる時に見返りは必要としません」

バーテンはそう沙耶香に返す。

「私の好意です」

「そうなの。それじゃあ」

そのカクテルを受け取った。ブルームーンカクテルであった。

「有り難く受け取らせて頂くわ」

「はい、どうぞ」

微笑みと共に紫のカクテルを受け取る。右手に持って口元を綻ばせる。紫の世界に沙耶香の白い顔が映っている朧な光の中に彼女はいた。

「有り難う。それでね」

「ええ」

話を戻してきた。バーテンもそれに応える。

「その絵はダリの絵よね」

「無論です」

彼は沙耶香の言葉に頷く。

「何処にあるのかしら、それで」

「プラド美術館です」

「あそこなのね」

それを聞いた沙耶香の目がピクリと動いた。

「あそこに」

「はい、そうです」

バーテンは彼女に伝える。

プラド美術館とはスペインが世界に誇る偉大な美術館である。西洋美術の中でもとりわけ粹を集めたとされている美術館であり展示作品は約二千、所蔵作品は約七千に及び全て王室や修道院の収集品である。

所謂略奪品は一点もないというのが誇りである。ここが大英美術館と違つとされている。建物は一八一八年に完成しており翌年美術館として開かれた。一八六八年の革命後でプラド美術館と改称され今に至る。現在は文化省所管の国立美術館でありベラスケス、ゴヤなどのスペイン絵画が質量ともに充実している他にフランドル、イタリア等の外国絵画も充実している。場所はプエルタ・デル・ソルの東約一キロ、プラド大通りを平行に庭を挟み少し奥まったところにある。マドリートの観光名所の一つであるのは言うまでもない。

「そこに新しく入ったもの一つです」

「そうだったの」

「はい、ダリの絵にしては変わったものにして」

「変わったもの？」

沙耶香はその言葉に顔を向けてきた。

「どんな絵なの、それは」

「蝶なのです」

「蝶……」

「そうです、蝶です」

バーテンは彼に語る。

「その絵には蟻の代わりに蝶が描かれているのですよ」

「ダリの絵にしては変わっているわね」

沙耶香は目に思案のものを含ませる。含ませながらさらに話を聞くのであった。

「それは少し」

「はい、しかもです」

バーテンはさらに沙耶香に述べる。

「その蝶の色は紫です」

「紫……」

その言葉を聞いた瞬間カクテルを見た。その紫のカクテルである。そのカクテルは青がかった透明な紫であるが彼女は今聞いた紫には別の紫を感じていた。

「そうです。それが実に綺麗な紫です」

彼は上機嫌でそう語る。

「一度見たら忘れられません」

「そう、紫なのね」

沙耶香はその紫を自分でも呟く。

「その色もダリにしては珍しい色みたいね」

「そうです。だからこそ印象的で」

「わかったわ。紫ね」

「はい」

「何もかもね」

バーテンからもカクテルからも絵からも視線を外す。そのうえで妖しく微笑んだ。

「何もかもといますと」

「いえ」

だがそれ以上は言おうとはしなかった。言葉を一旦は抑える。
「何でもないわ。安心して」

「はあ」

「けれど。紫の蝶ね」

「そうです。本当に綺麗な紫で」

「わかったわ。それじゃあね」

その言葉を受けて述べていく。

「今日はその紫に乾杯ね」

「紫にですか」

「ええ。マドリードの紫に」

にこりと笑って述べる。

「乾杯させてもらっわ。いいわね」

「ええ。でしたら」

「貴方に一杯ね」

「奢って頂けるのですか」

「絵を教えてくださいました御礼よ」

うつすらと妖艶な笑みを浮かべて述べる。

「だから。貴方にも」

「ブルームーン〓カクテルですね」

「そうよ。それでいいわね」

「喜んで。それでは」

「ダリの絵に」

ここで杯を合わせてそして。

「乾杯」

その言葉を交あわせた。そのうえで遅くまで酒を楽しむのであった。心地よい紫の酒を。

第二十七章

次の日沙耶香は速水のところに来た。扉をノックすると自然にその扉が開いてきた。

「お待ちしておりました」

「待っていたのね」

「ええ。来られると思っていました」

そう沙耶香に答える。見れば彼はテーブルに座っていた。

既に朝食や身支度を整えているのか落ち着いた様子であった。涼しげな顔で沙耶香に対して声をかけてきたのである。

「見つけられたのですね」

「わかるのね」

「はい、カードが教えてくれました」

懐から一枚のカードを出す。それは運命の輪であった。

「いよいよ大きく動きだしましたね」

「そうね。絵よ」

速水のところによって来る。静かに歩きながら言葉を進める。

「絵、ですか」

「そうよ。彼女の居場所はね」

「絵の中ですか」

速水はそれを聞いてすぐに依子が何処にいるのか小さなことはわかった。しかしおおよその場所はまだわからなかった。

「それでどの絵ですか？」

「ダリの絵。場所はプラド美術館よ」

「ほう」

速水はプラド美術館と聞いてその目を細めさせてきた。

「あそこですか。それはまた」

「いい場所でしょ」

沙耶香は速水に問う。問いながら速水の向かいに座ってきた。

「場所としては」

「そうですね。しかしダリですか」

速水も沙耶香と同じところに疑問を抱いてきた。二人の見ているところは同じであった。

「彼女の趣味とはまた違いますね」

「そう思うでしょ」

速水その言葉に目を細めさせ口元を微かにあげてきた。

「はい。マグリットならともかく」

ルネ＝マグリットのことである。ベルギーのシュール＝リアリズムの大家だ。ダリと並び称される偉大な画家である。しかし作風はマグリットの方が幻想的でありダリのいささか怪奇めいたものとは興味が違っている。

「ダリとは」

「蟻のことね」

「そうね、蟻ね」

沙耶香もそれについて述べる。

「ダリといえば蟻。そうね」

「はい。今あの方が使っておられるのは」

「それでもよ」

だが沙耶香は言う。

「それだけじゃないの。わかるかしら」

「あの紫の蝶ですか」

速水はすぐにそこにも察しをつけてきた。

「だからあの紫の蝶は」

「ええ。絵にあるらしいわ」

速水にそう述べる。述べながらダリの絵について語る。

「プラドにダリの絵が入ったの。それに」

「紫の蝶が描かれていると」

「そうよ。彼女はそこにいるわ」

「紫の蝶の絵の中に」

速水もそれを聞いてその右目を光らせる。黒い光がその眼に宿っている。

「わかりました。どうやら見つけるのは簡単なようですね」

「どうしてかしら」

「すつと笑みを浮かべる速水に問う。」

「何故ですか。蝶だからですよ」

「それが彼の答えであった。」

「ダリの紫の蝶ならばすぐに見つかります。ですから」

「プラドは広いわよ。それでもわかるのかしら」

「わかります。それに」

「それに？」

今度は沙耶香が問う。問いながらすつと速水の目を見る。

「あの方の魔力はよく存じていますので」

「そうね。それは私も」

「沙耶香もそれに応える。」

「そういうことね。それじゃあ」

「ええ。わかりますね」

「では今夜ね」

「今夜ですか」

「昼に行くわけにはいかないでしょう？」

「笑みを元の妖艶なものに戻す。そのうえで彼に言うのであった。」

「決着をつけるのは」

「ふふふ、確かに」

「速水もそれに同意する。同意しながらカードを懐の中に収める。」

「夜こそが相応しいですね」

「彼女にとっても私達にとってもね」

「やはり我々は夜の世界の者ということでしょうか」

「速水はうつすらと笑って言うてきた。」

「どうでしょうか」

「そうね。少なくとも」

沙耶香はそれに応えて述べる。

「夜が好きではなくて？」

「嫌いになれる筈がありません」

笑みをそのままに答える。

「私にとつては。それは貴女も同じですね」

「勿論よ」

沙耶香も速水と同じ笑みで返す。

「夜の美しさは琥珀と紫苑の美しさ」

そう述べる。

「その中で戦うことこそが至高の美なのだからね」

「わかりました。それでは」

「ええ」

二人は夜を待ち戦いに向かう。昼の太陽はやがて落ち夜の月が空を支配する。そこにあるのは黄金色の大きな満月であった。

沙耶香はその月を見上げていた。見上げながら述べるのであった。

「まずは綺麗な月夜ね」

「これもまた戦いに相応しいですか」

「いえ」

だがその言葉には首を横に振る。

「この月は戦いには相応しくないわ。むしろ」

「むしろ？」

「戦いの後にこそ相応しいものね」

細い目をゆつくりと細めながら述べる。

「勝利の後でね」

「勝利の後ですか」

「そうよ。この月は」

それが沙耶香の今の考えであった、その意識は時として気紛れであり時として確固たるものであった。今はその月を見て笑うのであった。

第二十八章

「勝利の後の美酒でね」

「その時は私もですね」

「さて。それはどうかしら」

速水の誘いには気紛れで応じた。

「気分次第ね」

「ではその気分に合わせてあげましょう」

「何で？」

「勝利の美酒で」

速水に答える。

「それで宜しいでしょうか」

「考えさせてもらおう」

闇夜からすつと目を話して述べる。

「今はね。勝利の後で」

「では期待していますよ」

「わかったわ。それじゃあ」

「はい」

二人は美術館の壁の前に来た。そこに手をやるとまるで溶け込むようにその中に消えた。後には誰も残ってはいなかった。

美術館の中は誰もいない。夜の闇の中に様々な絵画や彫刻が飾られている。沙耶香と速水はその中を二人並んで進む。

ピカソやゴヤ、ベラスケス、そしてダリのものも多くある。速水はそれ等の芸術作品を見ながらそつと沙耶香に声をかけてきた。

「勝利の美酒の後でここに参りませんか」

「美術館でデートなのですか」

「はい」

速水はそう沙耶香に答える。

「だからこそです。どうですか？」

「それも。考えておくわ」

「つれないですね。どうにも」

「女というものは気紛れなものなのよ」

沙耶香の返事はこうであった。妖艶な笑みを闇が支配する美術館の中で浮かべてきた。その笑みは闇の中に白く浮かび上がっていた。

「それを忘れてはいけないわよ」

「男とは一途なもの」

速水はその沙耶香に反論して述べてきた。

「それも忘れて欲しくはありませんが」

「聞いたことがないわね」

妖艶な笑みのままとぼけてみせる。ベラスケスやエル・グレコの絵を眺めながら。その絵と同じように闇の中で浮かび上がっている。まるで最初から美術館の中にいたようにだ。

「男心の残酷さは聞いたことがあるけれど」

「男心ですか」

「そうよ。男は罪深く、それでいて常に女を必要とするもの」

沙耶香は言う。

「それが男なのだから」

「男もまたお好きだったと記憶していますが」

「否定はしないわ」

妖艶な笑みの中で目をさらに細めさせてきた。

「けれど。女もまた好きなのよ」

「女も、ですか」

「男には男の、女には女の悦びがあるもの」

そう言ったうえでさらに述べる。闇の中に二つの足音が響く。皮の靴の音が何もない美術館の中に響き渡るのであった。

「どちららも。離れられないものよ」

「私は違いますがね」

すっと沙耶香に目を向けて述べる。

「私にとっては花は一輪だけのもの。それは」

口元に微かな笑みを浮かべる。浮かべながら言葉を続けていく。

「闇に咲く一輪の黒百合です」

「その一輪の花。欲しければ」

「どうされますか？」

「その百合の気紛れに誘われて魔界にまで至ることね」

またしても速水の言葉をかわす。かわしたところでダリの絵の集まりのところによって来ていた。

どれもが歪み、有り得ない世界が描かれた絵ばかりであった。時計に蟻、存在しない筈の場所に人がいて謎の影がある。その影を見ているだけで何かその影に誘い込まれて絵の中に入り込んでしまいうそである。沙耶香と速水はその中の一つの前で足を止めた。

その絵はダリの絵にしてはかなり風変わりなものであった。紫の美しく妖しい蝶達が舞って人々を取り囲む。睡蓮に横たわる人々はその上で恍惚として蝶に身を委ねている。その蝶の絵を見て沙耶香は述べたのであった。

「この絵ね」

「これがですか」

「ええ」

速水の問いにこくりと頷く。二人でその絵を見上げている。

「話に聞いたのはね。間違いないわ」

「紫の蝶」

速水は静かな声で呟く。

「妖しくもあり、かつ美しくもある」

「その蝶達を操る者こそ」

「あの方ということですね」

「そういうことね」

速水に対して答える。闇の中に紫の蝶達が羽ばたき舞っていた。

二人はその絵を見て言葉を続けるのであった。

「後は」

「あの方ですが」

二人はあの蝶を舞わす女を探す。そこで。

「来たのね」

後ろから声がした。すうつと白い影が舞い降りてきた。

「ようこそ。よくわかったわね」

「ヒントを知ったせいよ」

沙耶香は依子の方を振り向く。振り向いてから言っ。身体は絵に
向けたままである。

第二十九章

「ヒント？」

「そうよ。貴女のその蝶」

紫の蝶について語る。既にその蝶達は依子の周りを舞いはじめていた。

「ダリの絵にある蝶達だったのね」

「御名答」

依子はその言葉にうつすらと笑って答えてきた。

「では話は早いわ」

「そうね。どちらにしる避けられないものだし」

「何処にされますか？場所は」

速水は懐の中に手を入れてきた。既にやる気であった。

「私は何処でもいいですが」

「そう。それじゃ面白い場所があるわ」

依子は速水の言葉に心える形で言ってきた。楽しむ笑みをその口

元に浮かべながら。

「それはね」

「何処かしら」

沙耶香がそれに問う。

「といってもおおよそのことはわかるわ」

「確かに」

速水も沙耶香のその言葉に頷く。

「ここに来た理由が理由ですから」

「話が早いわね。その通りよ」

依子は右手を己の頭の高さに掲げてきた。手の平を半ば空けてそこに紫の光を宿らせた。そうしてその光をすぐに美術館全てに及ぼさせてきたのであった。

「紫の光ね」

沙耶香はその光を見ても落ち着いた顔であった。それは速水も同じだった。

「さて。この光が消えた後で」

「そうよ。舞踏の場にね」

依子は光を放ったままの姿で悠然と笑いながら応えてきた。

「貴女達を誘ってあげるわ。さあ」

二人が導かれたのはその睡蓮の世界だった。赤や白の蓮が青い水の上に咲き誇り緑の葉が水面を覆っている。その葉の一つの上に沙耶香と速水がいた。二人はその葉の上に立ちながら目だけで周囲を見回していたのであった。

「ここですか」

速水は周囲を見ながらふと述べてきた。

「私達の舞台は」

「そうね」

沙耶香は速水のその言葉に答える。

「あの絵の中ね」

「はい。ダリの絵の中ですか」

速水はそれを確かめながら楽しげに笑っていた。笑いながら周囲に警戒を払う。それは忘れてはいなかった。

「またとない場所ですね。光栄です」

「そうね。それで」

今度は速水にかけた声ではなかった。もう一人にかけた言葉であった。

「紫の蝶達は。やっぱりいないのね」

「そうよ」

依子の声だけが聞こえてきた。

「それはね。私のもものになってるから」

白い気が人の形を取って二人の前の蓮に姿を現わす。その気はすぐに依子となり二人の前に現われたのであった。

「ほら。ここに」

目を細めさせ先程紫の光を放った構えを取ってきた。するとその右手をあつ紫の蝶達が包み込んだのであった。

「こういうことよ。私は絵の中の蝶達を自分の魔力で自らのものにして」

「そうして使っていた。そういうわけね」

「ええ」

沙耶香の言葉にくくりと頷いてきた。

「わかったわね。そしてここは最早私の世界」

こつも述べてきた。

「貴女達にとつては。不利な場所に」

「さて、それはどうでしょうか」

しかし速水はその言葉に対して悠然とした笑みで返してきた。

「私達にとつてはここは楽しい舞踏の場です」

「そうね。折角招待してもらった場所ね」

沙耶香も述べてきた。

「それで不利だとは思わないわ」

「強気ね。相変わらず」

依子は二人のそんな言葉を聞いて言葉を傾げてきた。

「けれどそこがいいわ」

「でははじめるのね」

「ええ」

沙耶香の言葉にくくりと頷く。頷きながらその手の蝶を掲げるのであった。

「いいわね」

「駄目だと言っても許さないわよね」

「貴女のことですから」

「わかつてくれているのね」

その手にそれぞれ紅い雷とカードを出してきた二人を見て言う。

「嬉しいわ。やっぱり互いを知っているのはいいことね」

「因果なことね」

沙耶香は依子の今の言葉にこう返した。

「私は自由な恋愛を楽しみたいのだけれど」

「それはいつも楽しんでるじゃない」

依子はそう言葉を返す。

「何を今更」

「きついわね。その言葉は」

「嘘ではないでしょ。実際に貴女は」

「私はあくまで彼女達を楽しませただけ」

しれっとして言葉を返す。

「それだけなのね」

「どうだか。けれどその因果もここで終わりにしたいわね」

「そうね」

「全くです」

速水も言葉を述べてきた。

「貴女との数多い戦いもこれで」

「終わらせるつもりね」

「お互いにね。ではいいわね」

沙耶香はその手の雷を放ってきた。赤い雷が光の帯となって依子に向かって放たれる。

第三十章

依子はその雷を前にしても平然と立っている。ただその右手に纏わらせている蝶達を動かしてきたただけであった。

「甘いわね」

その蝶達を前にやるだけだった。それで雷を消し去ってしまった。

「雷までね」

「知っている筈よ。この蝶達は」

雷を消して再びその蝶達を身体の周りに漂わせて述べる。

「私そのもの。それで消せない筈がないわよね」

「この程度の魔術はつてことね」

「そうよ。わかってるじゃない」

顔のすぐ側に紫の蝶が一匹漂う。依子はその蝶を横目で見ながらくすりと笑みを浮かべてきた。

「さて。それでは私は」

速水はカードを投げはしなかった。そのかわりにカードを切ってきた。

「貴女に向ける送別のレクイエム」

「あら、丁重ね」

「人を送るにはそれなりのものがあるもの」

そう語りながらカードを繰り出す。そのカードは。

「さあ、これを」

出してきたのは十三番目のカード、死神であった。死神そのものがカードから飛び出し大鎌を手に依子に向かう。蓮の上も水面も滑るようになら進んできた。

「さあ、死神よ」

速水は死神が動くと同時に上に跳んでいた。

「彼女に今死の安らぎを」

「その言葉はどうかしら」

依子はその言葉に薄い笑いを向けてきた。死神を前にしても余裕であった。

「死は甘美な音色を持つもの」

「ですからそれを今貴女に捧げるのですよ」

「生憎だけれど」

今死ぬつもりは依子にはなかった。それを今はつきりと述べてきた。

「そのつもりはないわ。だから」

「死神と私からは逃れられませんよ」

彼は次のカードを出してきた。吊るし人だ。彼が放つ鎖で依子を捕らえようというのだ。

しかしそれは適わなかった。依子はその鎖を紫の蝶達の粉で腐食させていく。粉のバリヤーに防がれた鎖は彼女のすぐ前でまるで高温の中に置かれた鉄のように赤く溶けて落ちたのであった。

「これは」

「見事なものね」

速水に対して答える。

「死神の鎌と吊るし人の鎖の二つを使うとはね。また腕をあげたわね」

腐り落ちた鎖を眺めながら悠然と笑って述べる。しかしそのすぐ前に死神の鎌が迫る。鎌は真一文字に依子の首を狙っていた。

「このままいけば」

依子はその鎌が自分に迫るのを眺めながら悠然と述べる。

「私の首は落ちるわね」

「残念ですがね」

「そうね。あくまでこのままね」

しかし依子の余裕は変わらない。まるで自分が何があっても無事であるとわかっているようにだ。

「けれど。そうはいかないわ」

その鎌をかわすことはしなかった。何と鎌が彼の首を通り抜けた

のであった。

「むっ!？」

「言った筈よ」

鎌をすり抜けさせて速水に述べる。

「ここは私の世界だと。この蝶達は」

「まさか」

「そうよ」

上にいる速水の上から声がした。

「私の世界だから。あそこにいる私はあくまで幻影」

そこに依子がいた。上から速水を狙っている。

「私はここにるわ。そして」

全身に蝶を纏わせる。それで速水を包み込もうとしている。

「この蝶達はあそこにいるのもここにいるのも本物よ」

「そうですか。そしてその蝶で」

「魔界に旅立ちなさい」

蝶を舞わせてきた。

「この蝶で」

蝶達が速水に向かう。しかしそれを見ても彼は先程の依子と同じく悠然とした態度であった。そこに襲い掛かる蝶達を前にしてもだ。見ればその手には既にカードがある。

「蝶に対するならば私はこれです」

星のカードだった。それをかざすとそこから無数の光の星が飛び出した。それで蝶達を消し去るのだった。

そのうえで蓮の上に着地する。悠然と上を眺めながら依子と対峙する。上を見ているのは沙耶香も同じであった。じっと彼を見据えている。

「随分好き放題やってくれるわね」

沙耶香はそう依子に声をかける。

「絵の世界で」

「ダリの絵はまさしく魔術の世界」

沙耶香を見下ろしてそう述べる。述べる顔は仮面の如き邪な笑みになっていた。

「だからこそ私は選んだのよ」

「戦場、そして力を使いだね」

「そうよ。わかってくれたわね」

「わかったわ。それじゃあ」

今度は右手に青い雷を宿らせてきた。

「こちらも。本気を出させてもらおうわ」

「青い雷を。どうするのかしら」

「簡単なことよ」

その青い雷を水面に投げ入れた。すると雷はその中で派手に暴れ狂いその中で力をさらに増して上に向かって無数の雷の柱を立ててきたのであった。

「戦い方は幾らでもあるのよ」

沙耶香はその雷の中で笑っていた。依子を見上げて得意げに笑っていた。

「貴女の世界の中でもね」

「そうね。けれど」

依子はその周りに相変わらず蝶達をまとわせている。その蝶達を動かしてきた。

「雷は。効かないってわかってるわね」

まるで無数の龍の様に水面から空へ暴れ狂う無数の雷達であった。上から下へ、下から上へ幾条もつねり依子に迫る。だがそれを見ても態度は変わらない。それには理由があった。それはやはり蝶の力故であった。

「ほら」

雷は打ち消された。やはり紫の蝶達は青い雷でさえも通じなかったのであった。

「効かなかったわね」

依子は青い雷が次々に消されるのを横目で見ながら述べた。白い

顔と服の周りで青い光と紫の羽根が飛び散りその二つの色が彼女の顔と身体を照らすのだった。青と紫の色で白が染められる。

第三十一章

「やはり」
「そうね」

しかし沙耶香はそれを見ても平気な顔であった。魔術が破られたというのにだ。

「随分と余裕ね」
「ええ」

依子に対して答える。

「何かを隠す為には」
「どうするのかしら」

「大掛かりな仕掛けをすればする程いいのよ。実際ね」

「では今がそれね」
「わかるのね」

依子のその問いに不敵に笑ってきた。

「やっぱり。鋭いのね」

「それで。どんなカードを切ってきたのかしら」
「御覧なさい」

ここで自分を見るように言ってきた。

「私をね」
「!？」

その言葉に従うかのように彼女の姿を見た。見れば彼女の影が消えていた。

「成程ね」
影が消えたのを見て何を仕掛けてきたのか気付いた。

「お得意のあれね」
「そうよ」

沙耶香はその問いに答える。それも一人ではなかった。

彼女は何人もいた。複数の蓮の上の一人ずつ、幾人もの沙耶香が

いたのであった。

「さて、これならどうかしら」

「愚問ね」

その問いにうつすらと笑って返す。彼女にとってはこれはもう見慣れたものであった。だから今更何も驚きはしなかったということである。

「この程度じゃ」

「驚かないのね」

「勿論よ。まさかそれで私を倒せるというのかしら」

「そうよ」

余裕の笑みを浮かべて述べる。

「すぐにわかるわ」

「面白そうね。それでどうするのか」

「来なさい」

その笑みのまま依子を挑発してきた。スーツのズボンにポケットをしたまま平気な様子で。

「その蝶達で」

「言っわね。面白いわ」

「面白いのね」

「ええ」

宙に浮かんだまま妖しく微笑んで見下ろしてきた。

「死ぬつもりだなんて」

「さて、それはどうかしら」

だが沙耶香はまだそう返して余裕を見せ続ける。

「そう簡単にいけばいいけれど」

「貴女の考えがね」

依子はその蝶達を放ってきたのを見ても沙耶香は動かない。無数の蝶達が今依子の身体を離れて沙耶香に襲い掛かる。だがそこで彼女の思わぬことが起こった。

「むっ」

「やっぱりね」

沙耶香はその蝶の動きを見て確信の笑みを浮かべてみせてきた。

「こうなったわね」

蝶達は沙耶香の分身達にそれぞれ向かう。そしてそのまま完全に分散したのであった。

これこそが沙耶香の狙いであった。彼女はこれを狙ってあえて分身の術を使ったのである。そこには彼女自身の読みと計算があったのだ。

「どついうことなの、これは」

「蝶よ」

沙耶香は言った。

「蝶!?!」

「そうよ、蝶だからこうなる。読み通りね」

「一体どついうことかしら」

「蝶は花に集まる」

あの美人との情事の中で気付いたことであった。蝶は花に集まるのだ。それはどつしてか、そこまでわかつての分身であったのだ。

「だからよ」

「花に。つまり貴女ね」

「そうよ。そしてその集まる理由は」

「何かしら」

「色よ」

沙耶香は答える。

第三十二章

「蝶は見える色により集まるもの。だからこそ」

「その術を使った。そうね」

「ええ。これで私の勝ちね」

「さて。それはどうかしら」

しかし沙耶香の勝利の言葉はすぐに打ち消された。

「貴女が全て蝶に覆われては。どうしようもないわね」

「私が？」

「そうではなくて？」

また沙耶香に問う。

「貴女全てが消える。それで終わりよ」

「そう、私かね」

沙耶香達はその言葉を聞いて同時に笑ってきた。

「消えるのね。面白いこと」

「そうではなくて？」

全員で言う沙耶香達に対して述べる。

「実際に蝶達は向かっているわ。これで」

「お生憎ね」

ここでまた沙耶香の声がした。

「!？」

依子はそれが今いる沙耶香のどれからも放たれたものではないのに気付いた。そう、今言葉を発している沙耶香は見えはしなかったのだ。

「何処なのかしら」

「ここよ」

依子の目の前の青空が割れ、そこから漆黒の墮天使が姿を現わした。沙耶香は今その背に黒い炎の翼を作り舞っていた。その姿で依子を見据えてきていた。

「私はここにいるわ」

「そして私も」

今度は後ろからであった。振り向くとそこに黄金色の光があった。そこから速水が姿を現わしたのであった。

「移ったのね」

「はい」

よりこの問いにこくりと頷く。

「その通りです」

「どうやら。蝶達を離して勝負に出るつもりだったのね」

「そうよ」

沙耶香が答えた。

「わかったようね。それじゃあ」

黒い翼を回せる。速水もカードを出そうとしていた。

「いいわね、決着よ」

「参ります」

沙耶香の目が赤に、速水の顔の左半分が見えそこにある目が金色に光っていた。二人はその目で依子を見据えて技を放とうとしてきていたのだ。

「一撃で倒すつもりなのね」

二人に対して問う。

「ここで」

「その通りよ。覚悟はいいわね」

「チエックメイトです」

沙耶香は漆黒の翼を極限まで大きくさせ、速水は節制のカードを出してきていた。カードから絶対的なまでの冷気が出て辺りを覆わんとしていた。

「そう来るのなら私も」

依子の目が変わった。青い光を放ってきた。

「簡単にやられるつもりはないわ。いいわね」

「引かないのね」

「勿論よ。さあ」

今度は蝶達を出さなかった。かわりに全身に風をまとわせてきた。

「この風で。切り刻んであげるわ」

「面白いわ。そう来るのなら」

「私としましても」

煉獄の炎と地獄の吹雪が起こる。それを一挙に依子にぶつけてきた。

黒い翼が舞って前を覆い猛吹雪が絵の中を支配する。全てが焦げ尽くされ、そして凍りつく。依子はその中で無数の鎌イ足を放つ。それで二人を退けるつもりであった。

三つの力が激突した。黒と白、そして銀の三つの光と力が世界を覆い尽くした。それが終わった時沙耶香と速水はまだ宙の上に浮かんでいたが依子の姿は何処にもなかった。

「やったのかしら」

「どうでしょうか」

下を見れば蝶達の姿も消えていた。蝶の相手をしていた分身達は一つになり今沙耶香の影に戻った。だがそこにも依子の姿はなかったのであった。

「心配もしませんが」

「やった…….…….ではないわね」

「残念ね」

依子の声だけがした。

「私はまだ生きているわよ」

「そう、やはりね」

「では出て来られたらどうですか?」

「いえ」

しかし速水はその誘いは断ってきた。

「それはお断りさせてもらっわ」

「あら。何かあったのかしら」

「傷が深くてね」

依子の声は笑っていた。しかし姿は決して見せはしないのだった。「こちらとしても残念だけれど。今回はこれでお別れね」「やれやれです」

速水はその言葉を聞いて苦笑いを浮かべる。しかし依子本人が姿を見せないののでいささか拍子抜けした様子であった。それは沙耶香も同じであった。

「けれどまた会うことになるわね」

「ええ、またね」

沙耶香の言葉に答える。

「女の子達は離れたわ。魔界に入れていた彼女達はね」

「何処にもいないと思ったら。そこに困い込んでいたのね」

「ええ。そこで魔力と肉欲の糧にしていたのだけれど」

「残念だったわ」

「それで彼女達は無事なのですか？」

速水が依子に問うた。その問いは彼も沙耶香も期待したものであった。

「ええ。皆で」

「そうですね。それは何より」

まずはそれに安心した。依子はさらに二人に告げてきた。

「美術館の外に皆いるわ。それじゃあ」

「今度は日本でかしら」

沙耶香がそう声をかける。

「会えるのは」

「さてね。けれど今度会った時は」

「わかっているわ。今度こそね」

それがマドリードで二人が交えさせた最後の言葉だった。依子はその気配も何処かへと消えさせたのであった。後には何も残っていないかった。

第三十三章

「あの方がいなくなったということとは」

二人はまだ絵の世界で宙に浮かんでいた。速水は沙耶香と向かい合って述べてきた。

「この絵の世界も終わりということですね」

「そうね。けれどこれでこの事件は終わったわ」

沙耶香はまだ黒い翼を生やしていた。その翼を背に言うのであった。

「何はともあれね」

「そうですか。それでは私達も」

「ええ」

赤い目と金色の目の力を放つ。その力を使って今絵の世界から出た。そこは先程までの美術館であり何の変哲もなかった。絵も彼等の戦いがあったとはとても思えず至って平穏なままであった。

まずは戦いが終わった。しかしそれで終わりではなかった。

「では帰りますか」

「ええ。けれどその前に」

「女の子達ですか」

「そうよ。彼女達よ」

何故かここで口元と目元に笑みを浮かべさせてきた。妖しい笑みであった。

「救い出してね」

「そうですね。しかしその笑みは」

「何かしら」

「まさか狙っておられるのですか？」

速水もまたすっと笑ってきた。そうして沙耶香に述べる。

「彼女達を」

「さて。どうかしら」

そこはあえて誤魔化してきた。思わせぶりな様子を変えずにだ。

「それはね」

「やれやれですね。その嗜好は」

「時間があればね」

そう返すがそれでも考えは変えない。

「楽しませてもらうわ」

「仕方ないですね。何はともあれこれで」

「ええ」

その言葉には素直に頷く。二人は並んで美術館を出る。そのまま美女達を保護して事件を全て解決したのであった。

第三十四章

事件が終わり二人は多額の謝礼を受け取った後で日本に戻った。飛行機で早く戻るのではなく船旅を楽しみながらの帰り道を選んだ。豪華な客船での帰り道となった。沙耶香は船の後部のデッキで海を眺めながらワインを楽しんでいた。

「楽にされていますね」

白いテーブルに座っているとそこに速水が声をかけてきた。

「いえ、楽しまれていると言うべきか」

「ええ、そうよ」

速水に顔を向けて答える。その手にはグラスとワインがある。その杯を手に速水を見てきたのである。

「海を眺めながらね。こうしたものもいいものね」

「戦いが終わってくつろいでおられますか」

「それは違うわ」

それは否定してきた。

「これからのことによ」

「これからのことですか」

「そうよ」

その言葉に答える。

「彼女は今何をしているのか考えるとね」

「あの方についてですか」

「そうよ。また色々と考えているでしょうね」

「それは間違いないでしょう」

速水もそれに答える。

「あの方もあれで諦めの悪い方ですから」

「そうね。けれどそれは」

ここで速水から目を離して海を見る。

「私もよ」

「つまりまた会えば、ですか」
「そういうこと。楽しませてもらうわ」
「やれやれです」

その言葉に笑いながら側を通り掛ったボーイに声をかける。タキシードに身を包んだ黒い髪と目に彫の深い顔立ちの優雅な青年であった。

「申し訳ありませんがワインを」

「ワインは何を」

「貴方の御国のものを」

「それではモンテシーヨを」

リオ八地方の銘酒である。ボルドーのそれに似たコクのある味わいを持つ赤ワインである。彼の生まれはそこであるらしい。

「そしてチーズを。二人分」

「畏まりました」

「奢ってくれるのかしら」

「気が向きましたので」

沙耶香に笑って応える。身体は海を向いているが顔は彼女に向いている。

「それで宜しいですね」

「甘えさせてもらうわ」

すっと笑ってこう返す。

「その好意にね」

「有り難いことです。それでは」

沙耶香の向かいの席に座る。同じテーブルに向かい合った。

「これから日本への帰りは二人で」

「長くなりそうね」

「ですがそれがいいのですよ」

沙耶香の目を見て述べる。その琥珀の目を。

「貴女と二人でね」

「あら。二人じゃないわ」

しかし彼女はこう言うのであった。くすりと笑いながら。

「少なくともこの船の中ではね」

「また一人、ですか」

「いえ、三人よ」

うつすらとした笑みに変えて述べる。

「運がよかつたわ」

「全く。側にいる者にも応えて欲しいものですが」

「さてね。まあ今はともかく」

「はい」

笑みを浮かべ合いグラスを合わせる。それから飲みはじめた。

日本へと向かう船の後ろには無限の青い空と海が広がりその二つは遠い果てで一つになっているように見えた。ダリというよりはマグリットを思わせる幻想的な風景を眺めながら二人は。今は優雅に美酒を楽しむのであった。

黒魔術師松本沙耶香

紫蝶篇

完

2007・3・20

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7630b/>

黒魔術師松本沙耶香 紫蝶篇

2009年7月3日19時02分発行